3種の神器

さすらいの旅猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３種の神器

【Ｎコード】
Ｎ５１７２Ｍ

【作者名】
さすらいの旅猫

【あらすじ】
科学が発達し幽霊・妖怪・呪い・超能力と言った非科学的とされていた
存在が認められるようにった時代。世界では、人とそれ以外の種族の垣根も取り払われつつある。不思議生き物（未発見動物）も次々に発見され世界の発展は留まることを知らない。
それに伴い犯罪の多種・多様化。過激思想の増加等マイナス面も増えている。それでも世界は呪われし者・祓う者・超能力者の３種の力によって世界は均衡を保っていた。

これらの能力を有する人々をスキル持ちと言い
このスキル持ち達が織り成す物語。

登場人物（前書き）

今回は横文字しっかり合わせました！
気が向いたらどうぞ！

登場人物

随時更新

楠　一也（ｋａｚｕｙａ　ｋｕｓｕｎｏｋｉ）
普通の家庭、普通の頭、普通身体能力、普通の顔、普通の人生を歩む高２の男子。
１７５ｃｍ。お人好しで何かと人助けに走る。そのせいか、裏目裏目に物事が
出てしまい、喧嘩等によく巻き込まれる。皮肉にも、そのせいで打たれ強く
喧嘩慣れした男の子になった。また、不思議な力を持つ。

紺野　光（ｈｉｋａｒｉ　ｋｏｎｎｏ）
悪戯な瞳に子供っぽくあどけない表情の男の子。年齢よりも幼く見える。
高２、１６８ｃｍ。小さい頃からの一也の友達で、能力のない一也を追い駆け回して遊ぶのが長年のマイブーム。スキル持ちであり
能力は『超能力』に分類され、『発電』。一也のお向いさんでもある。

氷室　月夜（ｔｕｋｉｙｏ　ｈｉｍｕｒｏ）
大企業の令嬢・回転の速い頭・容姿端麗で一也と対照的な高２の女の子。
１６４ｃｍ。その見た目とは裏腹に内面は活発的。運動神経もズバ抜けて良い。

一也のお隣さんで、幼馴染。スキル持ちなのだが、能力系統は不明。

犬神　健（ｋｅｎ　ｉｎｕｇａｍｉ）
黒髪短髪の体格の良い高２男子。するどい目つきで周りに怖がられがちだが
動物や自然が大好きな優しい内面を持つ。１８１ｃｍ。
超能力はないが狼の呪いを持ち、その力を使うことができる。
能力系統は『呪い』に分類される。

森屋　港（ｍｉｎａｔｏ　ｍｏｒｉｙａ）
１４～１５歳の男の子。猫の森総合運動センターにて一也に出会う。
まだ悪戯が大好きな少年で初対面の一也にスキルで石の悪戯をした。
能力系統はで科学分野のもので、『反重力』の使い手。

神谷　凪（ｎａｇｉ　ｋａｍｉｙａ）
ショートヘアーで黒髪の小柄な女の子。高２で一也達と同じクラス。
１４８ｃｍ。
ぱっちりとした目で愛らしい顔つきだが、やる時はやるしっかりした性格。
妖怪・呪い持ちに対して力を持つ祓い屋の娘。家業は祓い屋。
スキル持ちで能力系統は『祓い』。『影法師』を操る。

緋色　悠（ｙｕｕ　ｈｉｉｒｏ）
パーマがかった赤茶のミディアムヘアーのお姉さん。年齢は１９～２０程度。
寡黙で、必要以上のことは喋らず、知的な雰囲気を纏っている。

スキル系統は『超能力』。

蛇狩　巧（ｔａｋｕｍｉ　ｈｅｂｉｋａｒｉ）
一也達と同じ学校の生徒。華奢な体付きで鋭い眼光。
スキル持ちで、系統は『呪い』に分類される。
蛇の呪いを持つ。

蔵元　重明（ｓｉｇｅａｋｉ　ｋｕｒａｍｏｔｏ）
精神現象学の権威。氷室グループの『猫の森』支部研究所の所長でもある。
呪い・祓い・超能力と言った精神の及ぼすモノ全般に広く携わっている。
自身も『規則性のない能力者』であることを告げる。
スキル持ち、超能力に分類され、能力名は－ｍｉｎｄ　ｊａｃｋ－

鮎川　真奈美（ｍａｎａｍｉ　ａｙｕｋａｗａ）
犬神編にて登場した小学生程の女の子。生き物が大好き。
『脳内投影』の能力を持つ。精神が未発達のために
上手く扱うことはできない。

登場人物（後書き）

読んでくれてありがとうございます！
仲良くしてやってくださいね

犬神編（前書き）

人ｖｓ人。まだ、主要人物と言ったスキル持ちの能力は隠してます。
主役も同じく謎めいたやつってことにしてます。

犬神編

科学が発達し幽霊・妖怪・呪い・超能力と言った非科学的とされていた存在が
認められるようにった時代。世界では、人とそれ以外の種族の垣根も取り払われつつある。不思議生き物（未発見動物）も次々に発見され世界の発展は留まることを知らない。それに伴い犯罪の多種・多様化。
過激思想の増加等マイナス面も増えている。それでも世界は
呪われし者・祓う者・超能力者の3種の力によって均衡を保っていた。
これらの能力を有する人々をスキル持ちと言い、このスキル持ちの人達が
織り成す物語。

深夜1時すぎ人の気配はなく、ケージに入れられた犬達も眠りについていた。
彼らは数日後にはガス室行きが決まっている。もちろん里親が現れれば話は別だが
そういった事例は珍しいし、犬や猫が殺処分されている現状は事実である。
と、犬達が突如起き始め、ケージの中でくるくる回ったり、吠えたりしだした。

哀れみの視線でケージを見つめる人物が一人いた。
「てめーらの勝手で捨てやがって・・・」
腕を振り上げ、人間離れした速度で振り下ろす。ケージについていた鍵を破壊し
犬がケージから出てきた。金色の綺麗な毛の色をしたゴールデンレトリーバー。
前足を下げお尻を上げて、尻尾を振っている。『遊んでよ！』の合図だ。

男は首を傾げた。
「毛並みも綺麗だし血統だし、なんでここにいるんだ？
それにしてものん気なもんだ」
と、男はその犬を撫でてやった。

次々にケージの鍵を破壊し、犬達を出していく。全てのケージを壊すのに
幸いにも時間はかからなかった。男は全ての犬を解き放ってやると、保健所から出た。満月の綺麗な夜で男は月に向かって咆哮し施設を後にした。
犬達もそれに倣って吠えると男の後に続いた。

日も沈み、暗くなってしまっていた下校途中を2人の人間が走っている。
一人は逃げ、一人は追う側である。楠一也は迫り来る発電マシンから必死に
逃げているところだった。年齢が上がるたびに能力も強くなっていき今では
発電マシンこと紺野光の静電気はとても危険なのだ。もはや、『静電気』
なる程度では済む威力ではない。

「ねぇ！頼むよ、新しいスキルの使い方わかったんだ！試させてよ！！」

そう言いながら、いつものニコニコしたあどけない表情で追ってくる。
その瞳は悪戯に輝いており、とても楽しそうである。
表情と言葉のミスマッチ感に一也は逃げながらもブルっときた。

「もはや、『静』電気じゃないだろうが！俺で実験すんなー！！！！」

逃げながらも気づくとある建物の敷地内に入り込んでいたようで広い敷地内を駆け抜け建物の正面玄関まで辿り着いてしまっていた。
振り返ると、光の放った電流が空気中をほとばしりながら向かってきている。

「ぎゃあああああああああす」

パリパリと大気中で電流が光っており、一也に直撃したことを示し

ていた。
へなへなっと一也はへたり込む。
起き上がろうとすると、目をきらきら輝かせた男の子が立っていた。
満面の笑みを浮かべている。この表情から察するとどうやら実験は大成功らしい。一也が起き上がるのを待ち、起き上がったところで、

「どうだった？」

「充分効いたわ！！！」

と必死に一也が抗議し、「まぁまぁ」と両手でなだめている光。
建物の押し開き式の扉が開き、暗い建物から人が出てきた。
恐らく男だろう。その後にはたくさんの犬が続いている。

「なんで人がいるんだ」
と呟いた。

一也は慌てふためきながらも、必死に言葉を探す。
「いぇ、すみません、迷い込んじゃった様で・・・」
光も後に続き、
「そうなんです、ちょっと追いかけっこしてたら、迷い込んじゃって！
健全な高校生はもう帰りますね！！あはは」
と、２人が踵を返し、その場を後にしようとした時だった。

重く低い声が人気のない敷地内に響いた。
「待て、見られたからにはこのままは返せないな」

２人は振り返り一也が弁明しようとした。
「俺達、何もしてないし、見てま・・・・あれ？」

語尾まで言うことができなかった。その目の前のものに驚き、
上手く言葉を発することができなかったのである。

一気に顔から血の気が引いた。今までいたはずの男の姿はそこにはなく、
代わりに堂々たる体躯をした狼が立っていた。2足歩行で1歩ずつ2人に
歩み寄ってくる。口元からは時折発達した牙が覗き、
狼独特の呼吸音が聞こえてくる。月の光に照らされた銀色の毛並みがとても良く映えていた。

唾を飲み込み光がかすれる声で呟く。
「スキル持ち・・・狼男」

狼男は腕を横薙ぎに放った。光は後方に退くことで避けることに成功したが
一也は間に合わず数メートル吹き飛ばされた。

「一也!!」
光のらしくもない声音で叫んだ。

「大丈夫、腕で少しは守れた・・・それよりっ!!!」
と、一也は苦笑いで返す。

狼男は一也を一瞥すると、目の前の光をじろりと見下ろし腕を振り上げる。
瞬間、光は狼男に対して腕を振り払い、電気をぶつけようとした。

「お前もスキル持ち、か」

そう言うと、恐ろしい反射神経で電撃を回避すると卓越した跳躍で光の後ろに跳びそこから素早く手刀を繰り出そうとしていた。

「止めろーー！！！！！」

一也の叫びと同時に、狼男の傍に落雷が起こった。空からはゴロゴロと
竜の低いうなり声にも似た音が轟いている。
先ほどとは変わり月は隠れ、今にも雨が降ってきそうな曇天が広がっていた。

狼男は空を見上げると、鼻を鳴らし
「運が良かったな、お前・・・お前もな」
と、光と一也に言い放ち、そのまますさまじい跳躍を見せつけ
その場から去っていった。
一也と光も急いで場を離れ、何とか事無きを得たのだった。

次の日は授業中も昨晩のことで頭がいっぱいだった。同じクラスの光は何事も
なかったかのように爆睡している。チャイムが鳴り、その日1日の授業が終える。
帰りの支度をし机の中の物を鞄に移す。用意が終わり立ち上がると

光が立っていた。

「昨日のことなんだけど！」

テンションが高く、今まで寝てた奴とは思えない。一也は返事をする。

「ん、どうかしたか？」

「・・・ニュースになってた。あそこは保健所でさ、ほら・・・たくさん犬もいたでしょ？」

「わけわかんねー生き物もいたけどな」

うんうん、と頷く光。光は話を続ける。

「ここ連日での保健所における、犬の大量失踪事件。僕達は、その現場に
出くわしちゃったってことだよ」

一也は首を傾げた。何か考えている様だ。

「えっと、つまり・・・？」

光は一也の鈍さに溜め息をついた。あからさまなオーバーな溜め息だ。

「つまり、あれが一連の事件の犯人だったってことだよ！！」

と同時に机をバンっと勢いよく叩く。とても興奮している様である。

「まぁまぁ、落ち着け。でもそうなると、あいつは何であんな事してるんだろうな？」

「それは・・・僕も考え中だよ」

2人があれこえ考えて話し合っているところに、突如、明るい声がした。

「2人揃って何やってるの？あたしも混ぜてもらうわ！」

一也、光の視線の先には同じクラスの氷室月夜がいた。
若干茶色がかった綺麗で女の子らしい長い髪、整った顔立ちというパーフェクト美人な事からクラス、学年中からの憧れの的となっている存在である。
見た目と裏腹に性格は奇抜なやつなのだが、幼馴染の一也と光しか知らない。
事の詳細を話すと、先ほどよりも明るい声で玲は提案した。

「じゃあ、今晩あたし達でそいつを待ち伏せしましょう！！」

「えぇ、危ないよ！」
光が抗議するが、全く聞かない月夜。

有無を言わさず、一也・光は女の子のそれとは思えない力で月夜によって
連行されてしまったのだった。

「それにしても、どこの保健所も警備すごかったね～。」
光の平和な声。「うんうん」と頷く一也。

「連日ニュースになってるし、こんなもんでしょ」
と、月夜が不機嫌ながらに答えた。

3人は放課後に適当に時間を潰すこともなく、警備が施されていない無警戒の保健所を探すまでに相当の時間が掛かった。それにより歩き疲れてしまったのか、月夜は若干機嫌が悪い。

「でも、時間潰せたお陰でこんな時間になったんだし、良かったろ」
溜め息まじりに一也が言った。

今、保健所の庭園の垣根の根元で3人は身を潜めていた。保健所の入り口も見える位置で待ち伏せするにはうってつけの場所だった。

「それにしても、ヤツはいつ現れるのよ・・・」
不機嫌を通りこし、キレかけの声で月夜が呟く。

月夜の機嫌悪くなると、当り散らされるのはいつものパターンで行けば
一也だ。何か機嫌を良くしようと、一也が考えているところに、人影が
保健所の入り口に向かって歩いていっているのが窺えた。

「あっ」
1番に気付いた光が声をあげた。それに倣って2人も光の見ている方向に
視線を投げかけた。

目を細めつつ、一也が呟く。
「なぁ、あれって違くないか？」

「普通の女の子ね、ぜんっぜん関係なさそうだわ」
キッパリと月夜が言い切った。闇夜にも関係なく自信の篭った言い方だ。

女の子がか細い声で何か言っている様である。
「すみませ～ん・・・誰かいませんか～？」

その声に反応するかのように、保健所の扉が開いて中から体格の良い長身の人間が出てきた。後ろにはたくさんの犬が続いている。
背格好からして、昨夜に一也、光が遭遇した男だ。

「ねぇ、あれって・・・」
光が身を一層とかがめながら言った。

「あぁ、背格好はあいつだな」
と、一也が答えた。

「あいつ、なのね」
月夜が気分を高揚させながら言った。傍目に見ても楽しそうなのがはっきりとわかる。

「さ、行くわよ！」
月夜がいきり立ったところで、一也が制止の声を発した。
「ん、ちょっと待った！」

「なによ？」

光も一也に続き、提案する。
「様子がおかしいよ、ちょっと見てから行かない？」
女の子の声がする。声に活気が出て明るくなった様である。
「あの、その後ろの・・・！」
男は目の前にいた小さな女の子にたった今気付いたのか
「あ？なんだ、お前は？」
と、言った。
一也・光と会った時と違い、相手が少女だからか警戒はしていない様子であった。呪いも発動させていない。
「そこにいる、小さなダックス・・・私のなの。」
と、男の後ろに控える犬達の１番先頭の犬を指差し言った。
「シェリー、おいで！」
保健所にやってきた頃とは調子がすっかり変わり、とても明るくなっていた。
シェリーは女の子の回りをくるくる楽しそうに走っている。
この光景を目にして、男は口元を優しく綻ばせつつ、
「逃がしでもしちまったのか？大事にしてやれよ」
「うん！ありがとう！」
と元気に女の子が言った。
男がその場を去ろうとした時、月夜は飛び出していた。
「見つけたわよ！連続保健所荒らし犬脱走犯っ！！」
と、男に向かって指差した。

一也と光はネーミングセンスには触れないことにした。
男の顔から一気に先程の優しさが消え、眉根を寄せつつ
「ぁ？お前は誰だ？」
月夜を追い駆けてやってきた、２人の姿を見て男は呟いた。
「そういうことか」
光が口を開く。
「今のやりとり見て思ったけど・・・でもやっぱり、君のしてることは
悪いことだよ」
男は鼻で笑いながら、
「鳥・猿・イノシシ・クマだって野生にいるんだ。
捨てられた犬達を野生に返して・・・自由を与えて何が悪いんだ？」
言い終わると、地面を足で強く蹴り、一也・光・月夜に向かって
一直線に突撃してくる。そのまま右手で３人に急襲をかけたのに対し、
月夜が軽々と片手で受け止めた。
「あたしが叩きのめしてもいいけど・・・」
そう言いつつ、月夜は横目で保健所の敷地への入り口、門の方を見た。
「警備会社の人が来そうね、そっちを止めるわ」
と、受け止めた手を払い、そのまま門の方へと向かっていった。
男は月夜の後姿を目にしながら、
「あの女は何なんだ、なんで俺の力を受けきれた・・・？」

独白するように呟いた。
「月夜も何かしらのスキル持ちだしなぁ、教えてくれないけど」
一也が肩をすくめながら言った。
その言葉で男は一也・光の存在に改めて気付いた。
「で、お前らは俺をどうするんだ？捕まえて警察に渡すか？」
「やっぱり、いけないことだし、見過ごせないよ」
光が戦闘態勢に入る。
一也も頭をかきながら
「不本意ながら参戦する」
と光に続いた。
「じゃあ、しょうがねぇな・・・」
と、数メートルの距離を無視するかのような速さで
男は一也に殴りかかった。
しかし、解ってたかの様に綺麗に身を後方に退くことで上手く避けた。
「こういうのは慣れてるし、読めればな」
その回避に合わせて、男は次なる一撃を左拳で突き出した。それをも上手く
後退しながらやり過ごす。しかし、そのまま男が突きのラッシュを一也に
浴びせ続け、終に一也が捌き切れなくなった一撃を放った。
体勢的にも確実に入る一発だった。男が口元に不敵な笑みを浮かべた。

「おいおい、これは、ちょっとマズイんじゃ・・・」
焦りを口にする一也。
突如、大気が光り輝き、閃光が男に向かって走った。
「っち」
一也に決まる筈の一撃だった手を引き、身を翻すことで
閃光、光の放った電気の弾を上手く受け流した。
男の標的が光に変換される。俊足で距離を縮めると、右手を振り上げ
光に振り下ろす。横に跳び、かわす。回避しながらも、光は男の視線が
自分に向けられていることに気付いた。それも、男は不気味に笑っていたのである。
男の腕は、そのまま、光のいたであろう場所の地面を穿った。
「もう電気はチャージしてある、食らえ!!」
そう言って、電気弾を撃つモーションに入った時、光に
土が飛んできた。男が地面を穿った時に土を握り、それを
光に投げつけていたのだった。
電気弾の対象設定をしくじり、それは男の丁度横側に逸れて、
地面に吸収された。と、ほぼ同時に光は、かすれる視界の端に
男が迫り来る姿を捉えた。その瞬間、体に重い衝撃が走り
吹き飛ばされてしまったのだった。
「光ーー!!」
意識を失う前、光が最後に聞いたのは一也の叫びだった。

「さて、まず1人。お前は少しは耐えられるか？」
「くっく」と含み笑いをしながら視線を一也に向ける。
「安心しろ、俺がてめーをぶっとばしてやるからよ」
この台詞を聞いて、急に大笑いし始める男。
「はぁあ？呪い開放してない俺に防戦一方じゃねぇかよ！
あんまり、調子に乗ってんじゃねぇ！！」
「呪い解放して、１００％の力で来てくれてもいいぜ？」
「小さい女の子の前だ。怖がらせることが・・・できるか！！」
言い終えると、一也に向かって急襲を仕掛ける。
腕を十字に構え、受けようとした一也だが、男の突きが当たる直前で一也を中心とする、半円の電気の壁が発生し、それが男の攻撃を退けた。
（光の電気か・・・？）
内心、一也は考えたが、この考えは即座に否定された。
光は今や、吹き飛ばされ横たわっており、完全に意識も飛んでいる。
それ程の一撃を直撃で受けてしまったのだから、超能力を使える筈もない。
「今のは焦ったな～、お前もヤツと同じで電気が使えんのか？」
痺れた腕を振りながら、男が言った。まだどこか口調からは余裕が窺える言い方だった。
「あんまり、調子乗ると黒コゲにすんぞ！
わかったら、大人しく・・・って、おい！」

一也のハッタリ作戦も虚しく男は皆まで聞かずに再び襲い掛かった。
「あのバリア程度のか弱い電気なら、ビリって来るって
知ってれば、怯むこともねぇんだよ！！」
と、電気の防壁を厭わない突きのラッシュを浴びせる。何とか突きを
捌き切る一也に対して、男は何度も電気の壁から電気を受けている
筈だが
本当に効いていない様で、構わず攻撃している。
（防戦一方じゃ駄目だ、俺にも光と同じ能力があるなら・・・！）
一也は男に大振りの一撃を誘い、男の体制が若干崩れたところで一
気に
後方に退き、男に向かってコンダクターの様に腕を振り下ろす。
男のすぐ傍に電気の柱が降り注ぎ、地面の土を舞い上げた。
「イメージと大分違う・・・。いや、これはこれでチャンスか！」
そう言うと、巻き上がった土埃を利用し、一也は男の後ろに回りこ
んだ。
「なかなか高威力じゃねぇか・・・。ん？あぁ、そういうことか」
男は嘲笑いながら、尚も続ける。
「狼の嗅覚を舐めるなよ？・・・バレバレなんだよ！！」
振り向きざまに一也のいる位置に的確な右ストレートを放つ。
距離的にも高さ的にも、確実に一也の顔に命中している筈だった。
しかし、その一撃は虚しく空を切った。
「お前、単純すぎ」
その言葉と同時に一也は右ストレートを放った男とすれ違う様にして

背後に回り込みつつ、男の首の後ろに肘鉄を打った。
直撃を受け、男は倒れこむ。同時に土埃も収まり始め、視界がはっきりとしてきた。

「流石に気絶してんだろ～」
と、安心する一也。

「く、くそっ・・・」
男は力気なく、起き上がったが、一也の方に向き直ると再び倒れこむ。
呼吸音も荒くなっていた。

「おいおい、もう観念しろ。普通、人間なら気絶モノだぞ？」
と、苦笑いを浮かべながら一也が言った。

「ふん、生憎、この状態でも少しは呪いの力を解放出来てるんでな」

「まだやるってんなら、さっきの一撃を直にお見舞いするぜ？」
脅し半分ならぬ、脅し１００％で言った一也だったが、これに対して思わぬところから横槍が入った。

「駄目だよ！このお兄ちゃんはシェリーを返してくれたんだからっ！」
先程の女の子が手を広げ、男と一也の間に立ちふさがった。「キッ！」と
一也を睨みつけている・・・つもりだろうが迫力がない。その隣で小さなダックスことシェリーも「ウー！！」と一緒に唸っている。

「おいおい、大丈夫、もう何もしないよ」
と一也なりの精一杯の笑顔で応対し、和睦の証に手を差し伸べたと

ころで
体が一切動かなくなった。
「あ、あれ・・・？」
悪寒が背中を走る。何か見えない力で一切の動きを抑圧されて
口以外が動かない。
女の子は一也の差し伸べられた手に気付き、
「仲直りの握手できる？」
と、子供独特の口調で言った。

そして、一気に一也に掛かっていた見えない力が解除され、今までが
嘘のように動けるようになった。一瞬の出来事で、今のが一也の
思い過ごしかどうかもわからなかった。しかし、動ける現実が今は
ある。

「おい、起きろ、仲直りの握手だってさ」
一也が仰向けに倒れている男に手を差し出す。

反応がない。

「ねぇ、犬のおにいちゃん・・・？」
女の子が心配そうに男の顔を覗きこんだ。
一也も一緒になって、見てみる。
「あ～、大丈夫。息もしてるし、お兄ちゃん寝ちゃってるんだよ！」
女の子を安心させる事を言う一也。

そこに丁度良く、月夜が戻ってきた。男が地面を穿った跡や
光や一也の落とした電撃の跡を見て「ふ～ん」と言うと
「あたしの出番はなしか」
と呟く。

残念そうに一也が口を開く。
「いや、男と光運ぶの手伝ってくれよ」

そうして、一也・女の子・男と光を引きずる月夜は、その場を後にした。

男・・・犬神健はベッドの上で目を覚ました。並んだベッドには見覚えの
あるようなないような男の子が寝ている。とても幼く見える顔立ちだった。
急に、寝ている健の上に、ぬっと顔が現れた。

「おわぁっ！！」

一気に退く健。それに対してジト目を向ける月夜。

「図体はでかいくせに、肝っ玉は小さいのね。同じ学校の犬神健君？」

「あぁ！てめぇは！！？」
健は全て思い出した、昨夜こいつら3人組と争った事、最後に体中が動かなくなり、そのまま気を失ってしまったこと。そして・・・

「なんでお前は俺の名前を知ってんだ！？」
言った瞬間、健は襟元を月夜に鷲掴みにされ、ぐいっと引き寄せら

れた。
「朝から、うるさいのよ。少し静かにしなさいよ」
健の知っている女の子像が、そこにはなかった。らしくもなく
迫力に負け、静かになる健。
「あ、あぁ、悪い・・・」
襟元を掴んでいた手から解放される。

「財布の中身の学生帳見せてもらったわ」
悪気もなく月夜が言った。

「はぁぁぁあ！！？」

この一声は月夜の睨みで瞬殺された。

「今は一也も光も眠ってるわ。あんたは運んでもらったあたしに
感謝しなさい」
窓際で椅子に座りながら器用に眠る一也を見ながら月夜が言った。

「これに懲りて、今後はあんなことは止めるべきね。あたし達が
止めたから良かったけど、他の人に知られてたら捕まってるわよ」

「悪い事なのはわかってたけど・・・どうも抑えが効かなくてな。
犬とか猫は悪くないのに、たくさん処分されるのが嫌だったんだ。
でも、飼うこともできないし・・・。」

溜め息まじりに月夜が口を開く。
「もっと違う方法で人に呼びかけることは考えなかったの？
何もやる前に、方法たくさんあるでしょ」

子供が拗ねた様に不機嫌そうに健が

「・・・思いつかなかった」
月夜の大きく溜め息をつく。
「あれ、そいつ起きたの？」
と、欠伸をし両腕を伸ばしながら一也。
「あれ～、ここは？」
これは光。
一也・光は揃って健に視線を向けた。
「よぉ、起きたか」
「あー！！君はっ！！」
落ち着いている一也に対して、慌てる光。
月夜が話の経緯を2人に説明すると、和也が口を開いた。
「そういう、保健所の動物と触れ合う交流会とか開けばいいじゃん」
腕を組みながら光も
「確か・・・そういう交流会ってたまにあるよね。頻度がどれ位かとか、規模がどの程度かとかは知らないけど」
「そ、そうなのか！？そういうのあるのか！？？」
目を見開きながら健が言った。
「・・・普通あるわよ」
健のテンションとは真逆に呆れながら月夜がぼやく。
「うん、あるよ。ただ回数とか規模がわからないから。こういうのって

ボランティアでやってみてもいいんじゃないかな？」
光が何気ない提案をする。

「よし、俺が絶対それを広めるし、実行してやる！！！」
一気に勢いつく健。

にっこりした満面の笑顔を健に向けながら
「そういうことなら俺達も協力してやるぜ？健」
一也が言った。

「あぁ、是非頼む！」

こうして連日賑わせていた保健所荒らしのニュースはパッタリと世間的には静かに幕を閉じた。しかし、この４人にとってはパッタリとではなかったかもしれない。

犬神編ー完

犬神編（後書き）

前から書いてみたくて書いてみちゃいました！
それにしても書くのって楽しいですね～

祓い屋編（前書き）

呪い・祓い・科学の3すくみの1つ祓い屋なる人間を登場させました！

気が向けば読んでいってくださいね。

祓い屋編

「夏休み明けに行われるクラス対抗風船割り大会のために合宿をしますっ！！」
夏季休業間近のホームルームの時間、学級委員の神谷凪の可愛らしい声が
教室中に響いた。軽快な雰囲気なので、黒いショートヘアーがとてもよく
似合っている。身振り手振りを加えつつ、
「しかし、まだ合宿予定地の下見等をしていません」
と語尾に行くにつれて落胆していくのがわかる声音で言った。

話の流れ的に下見メンバーを決めるためのホームルームだろうと
一也の直感が告げた。
「はぁ、面倒だな～」

「駄目だよ、そんなこと言っちゃ。聞こえちゃうよ！」

ヒソヒソ話をする一也と光。すぐ後ろの光にしか聞こえない程度の
音量で
喋った筈なのだが凪にはしっかりと聞こえていた様だった。
一也・光をジーっと直視している。

「それで、合宿予定地の下見に行く人を選びたいんだけど・・・
楠君！おねがいしてもいい？もちろん私も行きます！」

顔をしかめつつ、苦笑しながら一也が言った。
「えっと・・・おれ？」

「是非、出来ればお願いしたいな！」と間髪入れずに凪。
「一也、諦めな。応援してるよ」
光は自分には火の粉が降りかからなかったのを良い事にニコニコしながら
一也の肩をポンッと叩く。
落胆の意を表し、うな垂れる一也の姿がそこにはあった。
ここで悪魔の策を思いつく。ニヤリと笑みを浮かべ、その笑みは光に向けられていた。
「か、一也？」
光が不安そうに問う。次の瞬間、一也が元気良く手を上げた。
「なぁ、神谷、光も一緒に行きたいらしいんだけど、駄目か？」
「もちろん良いよ！人多いと楽しいもんね！」
すぐさま、ＯＫの返事が返ってきた。続けて、
「紺野君、よろしくね！」
ニコニコ笑顔を伴った凪スマイルに光は断る事等出来る筈もなかったのである。
「う、うん、よろしく」
先程の一也の様にガックリしながら、光が答えた。
これとは真逆に一也は笑いながら、
「はっはっは、よろしくな、光！」
と、先程の光の様にポンッと光の肩を叩いた。
「安心しなさい、聞いた限り合宿予定地はそんな酷いところじゃないわ」
近くに座る月夜が一也と光に言った。一也・光は月夜の言葉に

顔を見合わせたが、これは後々わかることになる。
こうして、一也・光のこの土日の予定は決まったのだった。

土曜日、朝１０時に駅に3人は集合した。
電車に揺られて1時間、バスに乗ること３０分、合宿予定地に着く。
天気も晴れていて、文句のつけようがない。街中からも離れており空気も澄んでいて、緑も多い場所だった。「猫の森総合運動センター」
それが3人が下見としてやってきた合宿予定地の名前だ。

「えっと、ここはテニスコートからゴルフ温泉プールｅｔｃとあらゆる運動を満喫できるように造られている施設です・・・」
パンフレットを読みながら、凪が説明する。

「それにしても、ひっろい場所だね～」
「うひゃー」と光が楽しそうに言った。

一也がくたびれつつも
「広すぎだろ！なんで駐車場から施設まで、こんな歩かなきゃいけないんだよ！しかも、見ろよ、あっちで森削って敷地広げるためか
まだ工事の跡あるじゃん！！まだ広くすんのかよ！」
と声を上げた。

3人は受付を済ませ、泊まる予定の3階の部屋に着く。建物の中身はなかなか綺麗で、時間かけてやってきただけの甲斐はあるものだっ

た。
部屋はと言うと、簡易なユニットバスに、ベッドがあるだけの
質素なものだったが、壁紙は白く綺麗で、ベランダに通じる大きな
引き戸からは
太陽の光が降り注ぎ、とても開放的な雰囲気をかもしだしている。
どこか
清潔感も漂っていて、シンプルにまとめた、という感じの部屋だっ
た。

「「「おおおぉぉぉ～！！！」」」
3人揃って驚きの声を上げた。合宿予定地、それも学校の行事のた
めのもの、
となると、あまり良い場所のイメージは受けないが、そんなことは
なかった。
良い意味で3人の期待を裏切った。

「こんな場所なら、俺はいくらでも下見隊やれるぜ！」
と、はしゃぎ始める一也。来る前とは大違いだった。

「でも、本当に良い施設だよね～。もっと劣悪な場所だと
思ってたよ！僕はウォータースライダーなんかで遊びたい！」
年甲斐もなく、ベッドの上で飛び跳ねながら言った。飛び跳ねている
感じからすると、結構フカフカそうなベッドだった。

「私もこんな場所だと思ってなかったわ。パンフレット詐欺とか
有り得る場所だと思ってたのに・・・」
ポカンと口を開けている凪。1番驚いている様であった。
ベランダに出て、辺りを見回しながら
「文句なしで、ここに決定でいいわね。それにしてもうちの学校と
こんな良い施設が提携してるってのが驚きだわ」

と凪。

「学校の理事って月夜ちゃんのお祖父さんとかじゃなかったっけ？
来る前に調べたけど、この施設も月夜ちゃんのお父さんとこの会社に
関連があったんだよ」
ふわふわベッドに横になりつつ、光が凪に説明をした。

「あいつの家って、でかいけど、やっぱすごいんだな。
あの言葉にはそういう意味があったのか」
改めて、氷室家の財力の凄まじさを認識する一也。
「それにしても」
ベランダに出て窓の外を眺める。
「敷地を広げるための、あの工事現場だけはリアルだな」
肩をすくめながら一也が言った。

「本当ね、あそこだけ現実的」
ベランダから森を見下ろす凪が言った。尚も続ける。
「あそこの工事現場には噂があって・・・」
語尾に行くにつれて、声が小さくなっていき全部は聞こえなかった。

「よし、施設探検に行こうぜ！」
と、現実から凪を引き戻すべく、一也。

顔を一気に明るくし、凪が賛同した。頷いた時ショートヘアーが
太陽の光を反射しつつ煌びやかに揺れた。
「うん、そうしよっか！」

「僕はいいや～、ふわふわしてたい～」
1名、ふかふかに負けてダウン。半ば夢見心地な光だった。
目は閉じかけで、とても幸せそうな表情をしている。

「まぁ、しょうがねぇか」と一也、凪の2人は部屋を出て、まずはグラウンドに向かった。
社会人チームだろうか、グラウンドで練習している人達がいた。

一也は広いグラウンドを見渡しながら、
「グラウンドも広いし、しっかり整備されてんな～」
感嘆の声をあげる。その時だった。

「あぶなーーーい！！！」
社会人チームの方から声がした。

「・・・！！楠君っ！」

「ん？」
一也が上を見上げると、白い球が一也に目掛けて、綺麗な放物線を描いて迫ってきていた。
「おわっ！」
両手でボールを防ごうとした。しかし、ボールは通常なら放物線を描き、一也に直撃する筈だったのだが当たる直前で真下に落下した。ボールはバウンドすることなく、地面に落ちる、というより吸い寄せられると
そのまま静止した。磁石に引き付けられたかのような動きだった。

「あ、あれ・・・？何だ、今の？」
一也が呟く。

「ごめんね、当たらなくて良かった！」
と社会人チームの1人がやって来てボールを拾って行ってしまった。

目の前で起こった不思議な現象に凪は首を傾げる。
「楠君のスキル？・・・スキル持ちだったの？」
首を横にぶんぶんと振る一也。
「いやいや、まさか！俺は生まれついての一般人だよ！」
2人のやり取りを見てる少年がいた。ただただ、じーっと見ている。つば付きの帽子をかぶっていて、ハッキリとはわからないが年の瀬は14～15位だろうか。光も幼く見えるが、それ以上に子供っぽい顔つきをしている。気になり、和也が声をかける。
「なぁ、もしかして、今助けてくれたりとか～したのか？」
頭の後ろをかきながら一也が言った。
少年は何も言わずに、落ちてる石を拾った。そして、一也に歩み寄りその石を一也に手渡す。その瞳が悪戯に光っていたのだが、一也は知る由もなかった。
「ん、この石がどうかしたのか・・・！！！」
驚愕した。質量と重量が見合っていない石で、とてつもなく重い。左手も使い、右手首を持ち必死に堪える一也。
「楠君？何してるの・・・？」
と訝しげに凪が聞いた。とても、不安そうな顔をしており
「この人は何してるの？」と言わんばかりの表情をしている。
それと同時に一也達に背を向け走り出す少年。と同時に勢い余って帽子を落としていった。だが、振り返らず走り続ける少年。
「ぁ、待て、少年！！」
追い駆けようとするが、あまりの重さに重心を動かすことすらでき

ない。
尚も、凪は挙動不審な一也を見つめている。本当はボールに当たってどこか頭を打ったんじゃないかと考えていそうだった。
少年が遠くまで行くと、石は嘘のように軽くなり、何ともなくなった。
「え・・？」
一也は凪に不審人物に思われたままいるのが嫌だったので、説明しつつ
その石を凪に渡した。しかし、既に、軽くなっており、見た目通りの重さになっているのではあるが。
「どうだ、重いか？」
眉根を寄せ、怪訝そうに凪は一也を見つめた。何も言わないで
一也から数歩後ずさる。
「なんでだあああああ！！」
一也の絶叫が施設内に響いた。落としていった帽子を一也は拾い上げると
帽子には森屋港と書かれていた。
「森屋港・・・か」

悪戯少年の帽子を落し物係りに届け、その後は
施設の下見を兼ね、色々歩き回っているうちに夜になった。歩き疲れた２人は
部屋に戻り、感想を言い合っていた。充実した施設で、公共の施設なのだが、

どの年齢層にも楽しめるようなレジャー施設となっていた。
時間をかけてやってきただけはあるな、と思い、
「それにしても、すごい所だな！これなら合宿に反対するやつなんか1人もでねぇよ！」
ご機嫌そうに一也が言った。

楽しそうに頷きながら
「うん、これなら大丈夫そうね！」
満足気に凪が答える。

部屋は真っ暗で、月の淡い光が差し込んでいた。ベッドでは光がすやすや寝ている。
たまに、むにゃむにゃしていて、観察のし甲斐がありそうだった。

呆れ顔で和也が口を開いた。
「こいつは土日を睡眠時間に使うやつなのか？」
昔から付き合いのある奴だが、ここまで寝るやつだとは知らなかった。

寝ている光の顔を見ながら、
「本当によく寝る子ね～。割には小さいけど」
もはや、その声音には感心の意が込められており、クスっと笑いながら
凪が言った。今は「よしよし」と撫でている。まるで小動物の様な扱いである。

程なくして、お互いの寝床につき、寝るようにした2人。

「楠君、今回は一緒に来てくれてありがとうね」

光を挟んで向こうに寝ている凪が一也に言った。

「俺は正直、楽しかったから、ありがとうはこっちの台詞だな」

「ありがとな」と一也は付け加える。

それを聞いて安心したのか、

「下見メンバーの話し合いの時、楠君・紺野君が行きたくてお喋りしてたのか

行きたくなくてお喋りしてたのかわからなくって・・・でも結局、楠君を

指名しちゃったんだけどね」

と、冗談めかして言った。

内心焦りながらも

「俺と光は行きたくてひそひそしてたんだよ！だから安心していいぜ！」

寝ながらにして、手振りを付け加えて返事をする一也。

「そっか、良かった。おやすみ！」

「あぁ、おやすみ」

・・・・・・・

・・・・・・

・・・・・

・・

・

（寝れねぇ！！！気分が高まってダメだ！！！）

「おやすみ」を言ってからどれくらい経っただろうか、一也はまだ

眠れないでいた。その隣のベッドでは光が爆睡の最中である。
すると、光の向こう側でごそごそと音がした。

（ん？神谷か？）

聴覚だけを頼りに探ろうとしていると、その音の主はベッドを出て部屋からも出ていった様だった。静かに扉を閉め、出て行く音。廊下からは
コツンコツンと足音が遠ざかって行く音がしていた。
一也は起き上がり、寝ているであろう凪に声をかける。
「神谷、神谷！いるか？」

返事がなかったので、光のベッドを飛び越え、凪の寝ている場所まで向かう。途中、光の手を踏んづけて、「うー！！」という唸りが聞こえてきたが、気にしないことにする。

「神谷・・・？」

凪の姿はそこにはなかった。

（今しがた出て行ったのが神谷？こんな時間にどうしたんだ）
時刻は深夜1時を指しているところだった。

部屋を出た足音を追跡していくと、ベランダから見下ろせる、あの工事現場に
辿り着いた。そこで凪らしき人物を見失ってしまい、一也は辺りを見回した。

森がざわめき、それと同時に一也の目の前にあったショベルカーが宙に
浮き始めた。ふわふわとしている。

「え・・・？」
マズイ、というような表情を浮かべる。

それは一也に向けて水平に飛んできた。意味があるはずもないが
反射的に両腕を出し、防御の体勢を取る。
しかし、それは当たる前直前に、直角に地面に叩きつけられたのだ
った。
まるで、昼間の野球ボールが一也に当たる前に地面に吸い寄せられ
た様な
光景だった。

「お？」

まだ、終わりではなかった。次々と工事現場にある機材や切られた
木が
一也に殺到する。そのどれもが、一也を中心に一定の距離まで近づ
くと
次々と地面に落ちていく。水平に飛んでいたものが直角に落ちると
いう
不自然な動きだった。しかし、この現象に一也自身は気付いていな
い。

「もう、なんだってんだよー！！」
腕でガードしながら叫ぶ一也。その声に、全ての物体は動きを止め
た。

「昼間のとろい兄ちゃん？」
木の陰から男の子が出てきた。声音からして、男だろうと推測できた。
一也は月光の下に出てきたこの男の子に見覚えがあった。昼間の野球ボールと石の少年だ。確か名前は森屋港。

「これはお前の仕業かー！？？」
和也が怒鳴り散らす。

港は顔をしかめつつ
「違うよ、これは森を削る人間への神様の怒りだよ」
と、森に対して特別な思いがある様に言った。

「はあぁ？！これがお前の仕業なら昼間のボールも石も説明がつくんだよ！」
勢いの止むことの知らない一也。

「だーかーらー、森の神様が森を護ろうとしてるんだって！」

「それは、お前の意見なんじゃねぇの！？」
と、一也は反論する。

港は面倒そうに溜め息をついた。
「小さい頃からここで遊んできたんだ。動物だってたくさんいるし。もう誰の意見でもいいよ、森がなくならなければさ」

「なるほど、そういうことだったのね」
一也の後方には凪の姿があった。声のトーンや口調は変わらないがどこかいつもと違う雰囲気を漂わせている。

「ぉ、神谷！」
「あんた誰？」
一也と港が同時に言った。凪は一也には軽く手を振って応えると、視線は港へと向けた。
「工事現場にて森の神様を演じて怪奇現象を起こしていたのは君だよね？森屋港クン？」
「なっ、誰だよ、お前！！」
港の口調からは動揺しているのが窺えた。
「ここの施設から解呪の依頼を受けた祓い屋の者よ～」
と手を振りながら、ニコっと答える凪。
驚きを表しながら
「神谷、そんな事情もあってここ来てたのか」
一也が口を開いた。
「ごめんね、隠してて。でも学校とこれとは別物だったし・・・だから、こうして夜にひっそりと行おうと思ってさ」
手を合わせて、凪はごめんねをしていた。
「くっそ！」
港は隙を窺って逃げようと走りだした。
しかし、ガクンと動きが止まってしまう。
「な・・んだこれ」
今や、港の動きはギコチなくなっている。油の足りないブリキのロボットの様な動きだ。今にもギギギと聞こえてきそうである。
凪が微笑んでいるのがわかり、港は近くに転がっていた木を凪へと

突進させた。

「仕組みはわからないけど昼間のボールにも同じことをしたのね・・・なるほど」

自分に向かってくる木を見ながら、余裕を見せつつ言った。

「神谷、危ない！」

一也が叫んだ。しかし、その心配は無用だった様である。

凪に木が当たる前に木は空中で動きを止めた。今の港と同じようにギシギシとした動きになっている。

「ふふっ、残念ね」

「まだだ！！」

港はショベルカー・木・トラックという工事現場にあるあらゆる機材を宙に浮かせた。先程、一也が浴びた倍の数があり、それらが空中を彷徨っている。ポルターガイストさながらの現象だった。

「その年で、こんなに沢山操れるのね・・・！」

予想していなかったのか、驚きを隠さない凪。

「これならわけわかんねー細工もできねぇだろ！食らえ！！」

港の言葉を合図に全ての物体は凪に目掛けて殺到した。どれもが対象目掛けて一直線に飛んでいるのがわかる軌道だった。

しかし、そのどれもが空中でその動きを止めてしまった。不自然に空中で留まっている。

ここで、港はあることに気付く。
「お前の、その足元のやつは何だよ！！？」
と、荒々しく叫んだ。

「あら？暗くて月明かり程度じゃ見えてなかったかしら？」

一也も宙に浮かぶ物体に目を取られていて、全然気付いていなかった。

凪の足元からは通常じゃ有り得ないほどの影があらゆる方向に伸びていた。
むしろ影が出来すぎていて凪を中心に地面は真っ黒になっていた。
そして、宙に浮かぶショベルカー・機材道具・木の影と言った、宙を舞う
あらゆる物体の影が地面の影に繋がっていたのである。

「影ある物は『影法師』からは逃れられないわ」

凪が、そういうと港の体は凪の方へとズルズルと動き始めた。
引きずられているところを見ると、港の意思は
一切関係ない様だった。

「くっそー！！」
港の言葉に呼応するかのごとく、地面が揺れ始めた。森がざわめき
視界がぶれる。しかし、それもピタリと程なくして止まった。
「な、なんで・・・？！」
狼狽しきった港の声がした。

「地面全体に港君のスキルをかけようとしたんでしょうけど、
無駄よ」

地面全体には蜘蛛の巣状に影が張り巡らされていた。凪を中心にとてつもない広さで影は広がっている。

「昼間のボール、機材の浮遊・・・そして一也君が重いって言った石。
総合すると、港君のスキルは超能力系統の重力操作ね？」
今や、目の前まで連れて来られた港に人差し指を向け、
自分の推理を披露する凪。今ではうな垂れうつむき加減な港。

港が口を開く。
「これは・・・」

「『反重力』だ！！」
と、自分で死角となっている背後から凪へと木を飛ばす。

が、地面から出てきた、人型の影に後頭部を殴られ、港は意識を失った。
その瞬間、浮遊していた全ての物体は全て地面に落ち、騒然とした。
辺りに夜の静寂が戻ると、
「これで任務完了ね」
凪の明るい声がした。

緊張が解け、大きく深呼吸をする一也。
「スキル持ちじゃない俺には刺激が強すぎる」

首を傾げつつ、
「あれ？楠君も同じようなスキル持ちなんじゃないの？
私が出て行く前にいくつも物体を叩き落してたでしょ？」
と、尋ねた。

「い～や、生憎俺にあるのは打たれ強さだけなんだよ」
苦笑しつつ、一也が答える。

２人はそのまま施設の人間に港を引き渡し、部屋に戻って寝た。
事情を知る一也としては港が可愛そうな気もしたが、こればかりは
しょうがないことだと踏ん切りをつけた。後々の話になるが、
港は強く怒られただけで済んだという。月夜の配慮があったとか
なかったとか・・・。

一也・凪も部屋に戻り完全に眠ってしまった頃。
先程まで、港ｖｓ凪が行われていた工事現場に人影があった。
赤茶の髪に若干パーマがかったミディアムヘアーの女性である。
誰かと電話しているのか声が聞こえてくる。

「えぇ、凪が上手くクリアしました。問題はなさそうです」

電話を終えると、女はその場を後にした。

祓い屋編（後書き）

読んでくれて、どうもです！
今後も気が向けば書いていきたいと思います。

私の世界～前編～（前書き）

２編に渡っての少し長いやつですけど、読んでくれれば嬉しいです！

私の世界～前編～

「君の夢、精神テスト、脳波・・・それらから調べてみても
既存するスキル持ちの人達とは違うものだね」
初老に入りかけているが、まだ若さの残る男、蔵元重明が言った。

「は～やっぱり、俺はただの人間か～」
肩を落としがっくりする一也。

「スキル持ちって言う方が珍しいのに、何言ってるの」
と、これは月夜だ。

2人は今、氷室グループの所有する研究所の直轄機関の病院に来ている。
一也の希望で自己分析をしてほしいとのことで、月夜が連れてきたのだ。
そして、一也にとって残念な検査結果が報告されたところである。

「いや、でも・・・一也君の検査結果は一般人のそれとも
ちょっと違う結果でね。まだ、何とも言えないっていうのが
正直なところなんだよ」
頭を掻きながら、やや当惑した表情で蔵元が口を開いた。

「って、ことは先生・・・！？」
一気に元気になり、自分の前に座っている蔵元へと身を乗り出す一也。

「普通は精神テスト・夢・脳波と規則性があるものなんだ。もちろん
スキル持ちにも同じことは言えるけど、彼らのそれにはどこかしら

普通じゃない部分がある。普通では見られない規則性がある、ということだ」

「そ、それで・・・？」

と、一也は蔵元の目を真っ直ぐ見て、説明を促す。

眼鏡をかけ直し、手元にある検査結果に再び視線を戻す。

「君の検査結果には規則性という規則性が一切ない。

機械の誤作動と思ったけど、他の患者さんに対しては

いつも通り機能しているし、それはないだろうということになったがね」

蔵元の説明によれば、呪い持ちは『夢のパターン』、『精神テスト』の

結果が基本の人の結果と異なる規則性を示すという。そして、科学的な

能力、超能力をスキルとして持つ人間は『夢のパターン』と

『脳波』が一般人と違った規則性を出すというのだ。

「でも、君の結果は『脳波』『夢』『精神鑑定』の全てにおいて

一切の規則性を持っていなく、一般人のそれとも、スキル持ちの

それとも違ったものになっている」

実に興味有り気だというように、検査結果の用紙に見入る蔵元。

検査結果の用紙を横から見つつ月夜が

「本当にハチャメチャですね、先生」と言った。

冷たい目で一也を見る。

「そうなんだよ、それで私も困ってしまってね」

苦笑を浮かべ、蔵元が言った。

「私は精神現象学をやってきて、あらゆるパターン・規則性を見てきたが、この手のものは見たことがない」

「じゃあ、先生、俺って何か『スキル』があってもおかしくないってことですか?!」

「う〜ん」と蔵元は唸った後に、

「現状では、その可能性もあるし、そうじゃないかもしれない。本当に何もわからないってことしか言えないかな」

言葉の後半が否定的なせいもあってか、一也は再びうな垂れる。

「そっか、残念だな」

「ぁ、でも」と蔵元。

「この結果は、どういう適正があるのかを調べるもので適正があるなしに関わらず、スキルを発現する人はいるよ。『精神的にどんな現実を望むか』・・・この願望とも言うべき精神力が強ければ能力は発現すると私は考えている。でも、人間は深層心理では、自分にストップをかけちゃうからね。だから何でもというわけにはいかず、1人が持てるスキルは1つまでというのがとても興味深いところだね」

「そんなことがあるのか〜」

と素っ頓狂な声をあげる一也。

「そう。だから私は祓い・超能力は全て精神が及ぼす精神現象学という括りにまとめることができると考えているんだ。呪いに関しては、生来その人が持つべきもので、

その人の祖先が、呪いをかけてきた動物に何かしたからだろう、
というのが有力な見解かな」

ここで、一也は蔵元のデスクの上に写真立てがあることに気付いた。
そこには若い蔵元と1人の女性が写っている。女性は蔵元に寄り添う様に
立っている。2人ともとても穏やかな表情をしている。

「先生、その写真って？」

「あんた、何聞いてんの？」と呆れ顔で月夜。

「あぁ、いいんですよ月夜さん。・・・これは私が医者で
まだ、こっちの世界に足を踏み入れてない頃の写真だね。
彼女は当時お付き合いしていた女性だよ」

「まぁ、今は彼女はもういないがね」と、最後に付け加えた。

その時、瞬間的に蔵元の顔が陰ったのを見過ごさなかった一也は
悪いことをした気分になった。蔵元の視線は写真を見ながらも
どこか遠くを見ている様だった。

「それでは、用事もすみましたし、今日はありがとうございました」
「先生ありがとうございます！」
月夜に続き一也もお辞儀をする。

「ん、あぁ、何か気になったらいつでもおいで。君はとても
興味深いからね」
と、一也を見ながら蔵元が言った。続けて、

「月夜さんも、また用事があれば、いつでもどうぞ」
人当たりの好い笑みを浮かべ会釈をする。
2人が蔵元の部屋を出て行くと、蔵元は自分のデスクの引き出しから
あの人物の検査結果書を取り出し、それを一也の物と見比べてみた。
「やはり、同じだ。規則性がないという事も一種の規則性という
判断は間違っていないということか」
蔵元が見比べている一也ともう1人の検査結果書はパターンがなく
どちらもメチャメチャなものであった。自然と笑みがこぼれる。
そこに一本の電話が入った。

「どうした？私だ」

2人が病院を後にして、帰路を歩いてるところだった。帰るには、
街中の
商店街を抜け、少し歩く。その街中と住宅街との間には様々な施設
があるのだが、
その1つでとても賑わっているところがあった。
街中を通り抜け、公道が続き、その歩道を歩いている2人。いつも
なら
そこまで人出があるわけでもない。なぜなら、街中へと続く道路が
敷設されてるだけで、言わば、通り道でしかないからだ。しかし、
この日は
少し違った。ペット連れの人々がやたら多く、1つの施設へと向か
っている。

人の賑わいを見ながら
「今日って何かあるのか？」と、一也。

「目的は、あそこらしいわね」
視線で、その場所を月夜が示した。

そこは健と最後に戦った場所で保健所でもある場所だ。門のところには
『動物ふれあい広場』と掲げた立て看板が出ている。幼稚園の学芸会の様な
優しいタッチで描かれていた。

「ちょっと、見ていきましょ」

「って、おい、月夜！」

さっさと行ってしまう月夜を追いつつ、一也も施設内に足を踏み入れる。
月夜の意識は完全に、動物ふれあい広場に向いていた。
施設内には簡易な囲いが設置されており、その中にはたくさんの種類の
犬達が走り回っていた。人もその中に入って一緒に遊べる様になっている。
その囲いの中に一際大きく、身長の高い男が混ざっていた。施設のスタッフの様であり、腕にはスタッフの人達が付けている印を巻いていた。
その男も、一也達に気付き2人の方へとやってきた。

「よぉ、あの時は世話になったな」と犬神健が言った。

「もしかして、この催し物は健が・・・？」
と、顔を引きつらせながら一也訊いた。

「もちろん俺が施設の人間に頼み込んだ！おれ自身、犬と遊ぶのは大好きだからな！」
屈託のない眩しい笑顔で答える健。

「行動力はすごいあるな」
「誰にも負けないんじゃないかしら」
一也・月夜の２人は驚きながら言った。
この行動力こそが、健を保健所荒らしに駆り立てたと言ってもいいだろう。
今の健はとても優しい顔つきをしており、活き活きしている。

「俺達は適当に遊んだら帰るから、健は引き続き頑張・・・！？」
一也が言いかけた、その時だった。施設の一角が倒壊し、そこに胴回りは数メートルはあろうかと言う程の大蛇がいたのだった。
土煙が舞い上がり、下の方は見えないが、全長もかなりの長さだと推測できる大きさだ。辺り一面パニックに陥っている。

人波とは逆の方向に健が駆け出す。
「あそこにはチビが・・・！」

「け、健！！！」一也が呼んだが、健は振り返ることはなかった。

一也と月夜は顔を見合わせると無言で頷き、健の後を追うのだった。

時は、一也・月夜の2人が病院を出たところまで遡る。
犬神健は今は保健所で犬のふれあい広場でスタッフとして動いていた。
囲われたケージの中から犬達が逃げたりしないように、また、来訪者と
犬たちが適切なスキンシップを取れるように教えたりする役だ。

小さな女の子の声がした。
「犬のお兄ちゃんっ！」

「お？」

そこには小さな女の子がいる。傍にはダックスことシェリーも一緒だ。
なぜか、シェリーは健の回りをぐるぐるし始める。歓迎しているのだろうか。

「あの時のチビッコか！」と、頭をくしゃくしゃしてやった。
ぐるぐる回るシェリーも撫でてやる。

「チビッコじゃないよ、真奈美だよ！」と、ぷーっと頬を膨らませご機嫌ななめの反論する。
一緒にシェリーも「うー！！」と唸りだす。完璧なコンビである。

「はは、わるいわるい」と頭を掻きながら謝る。ここで健は
今日の自分の立場を思い出した。
「俺はやることあるから、ちょっと行って来る。今日はたくさん
遊んでいけよ～！」
健の最大の失敗は真奈美を独りにしてしまったことだった。

見られているということに気付く筈もなく、健は真奈美から離れてしまった。

健と真奈美を見張る人間が保健所内に2人いた。休憩所にて休んでいる様である。1人は赤茶の髪をしている女性で無表情でその女性は誰かに電話をかけている最中だった。

「ターゲットを発見しました。もう少し様子を見ますか？
・・・・・。了解しました。それでは」
事務的な口調で話しつつ、電話を終わらせると
「暗くなるまで待て、らしいわ」
と、告げた。
告げた相手は誰かと言うと、この女性の前の休憩用の椅子に座っている男性である。華奢な身体つきをしており、一也達の通う学校の制服を着ている。肌は白く、眼光はするどい。

「こんな、簡単な仕事、今やっちまおうぜ」
不機嫌そうに、窓の外にいるターゲットを見ながら言った。
「・・・！ほら、ちょうどでかい奴もどっかいったぜ？
それじゃ、さてと」

そう言い、立ち上がると徐々に肌の色が変わり始めた。まず目が爬虫類の持つそれになり、口が耳の辺りまで裂け始め、牙を覗かせていた。
斑模様が浮かび上がってきて、縦に縦にどんどん大きくなる。
それに伴い胴回りまでもが太くなっていった。

「・・・？！」

身の危険を察知した女は、音速とも言うべき速度で遠ざかった。
残像を引きつつ、距離を取った直後に、呪いを解放した『それ』の大きさに耐えれる筈もなく、建物の一角、休憩室の辺りは残骸と化した。

遠目から見ても、その大きさはわかってるつもりだったが、遥かに想像を
越える巨大さだった。健が真奈美の元に到達した時には、大蛇は真奈美に
顔を寄せ、大きく口を開いているところだった。真奈美はシェリーを抱きしめ
恐怖でその場にへたり込んでいる。

「チビ！」
すかさず、超俊足で近づき、大蛇の顔に右拳を叩き込む。
皮膚が硬く、殴った健にもダメージがきてしまった。

殴られた大蛇の瞳が気味悪く動き、健に向けされた。
「んだ？てめーはっ！！！」
尻尾を健へと叩きつける。衝撃で地鳴りが轟いた。

素早く、真奈美を抱きかかえ、遠くへと跳ねる。
「ここにいろ」と、下ろし、怯えている真奈美を元気付けようと
頭をぽんぽんっと叩いてあげた。優しさを込めて。

「お前、喋れるってことは呪い持ちの人間だな？」
大蛇に訊いた。

大蛇は蛇独特のシュララという音と発しつつ顔を上げ
数メートルの位置から健を見下ろす。
「ったりめーだろうが！呪い持ちじゃなかったら何なんだ？
俺は蛇狩巧、よろしく・・・な！！」

すかさず、尻尾を健目掛けて横薙ぎに振る。しかし、避けるのは容易く
空中に高く飛んで避けた。そのまま、着地すると再び跳躍する。しかし
今度は大蛇の頭へ向けて飛んでいた。

「もう1発お見舞いしてやるよ！」
そう言うと、右拳を強く握り締めて思い切り大蛇の顔へ向けて
叩き込んだ。いや、正確には叩き込もうとした、だった。
当たったかと思われた直前、大蛇は俊敏な動作で、身体を横へとずらしていた。

「当たるか、馬鹿がっ！！」

大蛇は避けると少しの遅延もなく、滞空中の健を大きな口で咥えた。
健はそのまま、地面へと叩きつけられた。

「がっはっ！」
肺から空気が抜け、一瞬目の前が白くなった。呼吸するのが
難しくなり、息遣いが荒くなる。起き上がろうとした時に周りが
黒い影に覆われたことに気付いた。次の瞬間、大蛇の尻尾が
振り下ろされる。それが何度も続き、地面は健を中心にへこみ
始めていた。服はボロボロになり、土埃が舞い上がっている。

「そろそろいいだろう」
甚振るのを楽しんだ大蛇が健を真上から覗き込む。
「くっそ・・・」
健は多大な打撃を受けながらも、意識はしっかりと保っていた。
「!?まだ気があんのか・・・なら、大人しく眠れ!」
牙から毒をしたらせながら、健に噛み付こうとした。
「な・・んだ?」
その瞬間金縛りにあったかのように、大蛇は動けなくなり。少しずつその巨体は空中へと持ち上がっていく。
「こ、これ以上、犬のおにいちゃんをイジメないで!」
泣きじゃくりながら、真奈美が言った。
(喋れねぇ?!身体がバラバラになりそうだ・・・!
あらゆる場所へと引っ張られてる!)
大蛇は苦悶の表情を、その瞳で表している。
(このガキがぁぁぁああ!!)
「きゃっ!」
真奈美の鼻と口元にハンカチを押し付ける女の姿が、そこにはあった。
先程、休憩室で巧と一緒にいた女だった。
すーすー、と規則正しい寝息を立て真奈美は眠らされてしまった様だ。

それと同時に大蛇を縛っていた不可視の力も解け、巧は呪いの力を封印する。

「っち！ガキが！」悪態をつく巧。

「油断しているから、こうなる」と、事務的な口調で女。

何とか起き上がり、立ち上がった健が呟く。

「チ、チビ・・・！」

まだ呼吸が荒く、また身体のそこら中青あざが出来ていた。

「健ー！！！！」

一也の叫び声がした。

「誰か来る、退きましょう」

女がそう言うと突風が吹き、その風に乗って真奈美を抱えた女と巧は飛んでいってしまった。

遅れて一也・月夜がやってくると、目の前には見ていられない程に痛々しい姿になった健の姿があった。

「大丈夫か、健！！！」

2人は健に駆け寄る。

息も絶え絶えに健が口を開く。

「チビが、連れてかれた。助け出す・・・！」

そう言うと、その身体のダメージからは信じられない程の跳躍を見せ、

真奈美が連れて行かれた方へと飛び出したのだった。しかし、それは明らかにぎこちない動きで、無理をしていることが誰にでもわかる

動きだった。シェリーの悲しそうな鳴き声が響いていた。

私の世界～前編～（後書き）

次で、この話は完結します。よんでくださり、ありがとうございます！！

私の世界～後編～（前書き）

ここで終わりにするつもりでしたけど、あまりに
半端なので、後日談としてもう１つまで行ってしまいました。
そちらも出来ればＵＰしようと思います。

私の世界～後編～

２人は病院裏手に位置する研究施設へと到着していた。日が沈みかけており、
人の気配は、もうなかった。そんな無人と化した研究施設の中庭を通り
正面玄関から中へと入る。自動ドアは、まだ作動中の様だった。
エントランスホールには受付があり、待ち合い者用の椅子が設置されている。
しかし、受付にも人はいなく、広い空間は静寂が支配していた。
２階まで吹き抜けの造りとなっており、開放的な雰囲気でもある。

巧の歩みが止まり、横目に後ろを見る。

「巧、どうした？」
真奈美を抱き直しながら、女が言った。

「緋色は先に行け、諦めの悪い馬鹿を始末したら、俺も行く」
巧が不敵に笑うと、口元に鋭い牙を覗かせた。

「あぁ、そうだ！猫の森研究所の付属病院裏手！そう、研究施設だ！」
焦燥感を露にしながら、武が言った。電話の相手は一也だ。
携帯をしまうと、２人が入って言った正面玄関を目指した。広い中庭を
疾走とも言える速さで駆け抜ける。

人の存在を感知し、自動ドアが開いた。静寂の中に自動ドアの開閉音が
広いエントランスに不気味に響いた。
と、同時に奥にあるエレベーターの中にいる女と目が合った。
真奈美を抱えている緋色悠という女性だ。

「待て！！」
健は足の筋肉全力で地面を蹴った。走り出しから最高速で、一気にエレベーターまでの距離を詰める。

エレベーターは、まだ閉まりかけていなく、その速さを以ってすれば余裕で間に合うかのように思えた。しかし、健は直線にエレベーターに
向かったのだが、途中で横に大きく跳んだ。
ただならぬ殺気を感じたからだ。

「よ～、ここまで追ってくるとはな」
待ち合いの椅子に腰掛けていた男が悠然と立ち上がる。蛇狩巧だった。

「・・・！お前か！」
手負いの健には厄介な相手だった。汗が頬を伝うのを感じた。

「さてと、第2ラウンドと行くか・・ね！！」
すかさず、蛇の呪いを解放し健へと突進を繰り出す。

手負いとは言え、それすらも軽々と跳躍して回避する健。両者の位置関係は当初とまるっきり入れ替わっていた。突進は見事に壁にぶつかり、衝撃の凄まじさは破壊された壁が物語っている。

巧は自分の後ろに跳んで避けた健に向き直ると、口元を
にやつかせ、牙を見せた。
「常人とは違うなと思ったが・・・呪い持ちの系統だったか」

「人目もないし、この姿はお前にしか見られないからな」
狼の呪いを解放した健が言った。

「あ？」と大蛇は不思議そうに首を傾げる。
「てめーは呪いにコンプレックスでも持ってんのか？」と訊いた。

「人に怖がられたくないからな」至極真面目に健が答えた。

エントランスに笑い声が響く。
「呪いは選ばれた者にだけ与えられるんだよ！
疎まれ、畏怖され、時に祀られる・・・それが『呪い』だ！
その家系の者にしか現れない希少なスキル！」
言いながら、巧は大きな口を開き、健に噛み付こうとした。
この大きさで噛まれれば、一溜まりもないだろう。

向かってきた口に健は近くにあった椅子を放り投げる。大蛇はそれを
吐き出すと、今度は横薙ぎに尻尾を振った。待ち合い者用の椅子を
次々とふっとばし、長い尾は健へと向かう。
健は跳びつつ避けると、同時に尾に対して鋭い爪で切裂きの一閃を
放った。頑強な皮膚も堪えられず、皮膚が裂け爪跡の筋ができた。
そこから鮮血が舞う。

「狼をあまり舐めない方がいい」、華麗に着地すると健が言った。

「てめぇ、やりやがったな！！！」

今度は太く長い尾を縦横無尽に暴れさせる。その1回1回が的確に健の位置にやってくる。

向かってくる尾に対し、捌きつつ爪を立てて応戦するが、微々たるダメージしかなかった。1回避けた尾が凄まじい速度で切り替えされてきた。

「くっそ！」

直撃してしまったが、狼の姿になっていたお陰で身体への影響は少ない。しかし、壁に打ち付けられ、大きく体勢を崩すことになってしまった。そこに避けられない速度で牙から毒を滴らせた大蛇が接近してきていた。

一也は健からの電話が終わると、すぐさま光へと電話をかける。

（早くでろ、早く！！）

健との電話で焦燥が伝わってきていた。電話口から光の声がする。

「なに～？僕今、病院にいるんだけ・・・ど？」

語尾が疑問形になったのは、言い終わるより早く、一也が大きい声で訊いたからだった。

「どこの病院だ！？」

一也達の焦りを理解出来る筈もなく、いつものトーンで光が答える。

「猫の森病院。なんか風邪っぽくてさ～」

「そのまま、裏手の研究施設へ行け！俺と月夜も向かう！」と、一也。

「えぇ？どうし・・・て？？」

再び語尾が疑問形だが、今度は電話が切られてしまったからだった。

ツーツーという音が携帯から光の耳へと鳴っていた。

「今、一也と月夜ちゃんも来る・・・？たまに起きる

軽い地震と関係でもあるのかな」

切れた携帯を見ながらポツリと呟く。再び軽い地響きが起こる。

その地響きが光の足を裏の研究施設へと向かわせたのだった。

光が着くと、そこは椅子は散乱しており、壁にはいくつもの穿った跡があり

ただ事ではない雰囲気をかもし出している。

見たこともない程の巨大な大蛇が壁に打ち付けられたのであろう、狼に

大きな口を開けて迫っている。直感的に光は電気弾を大蛇へと投げつけた。

大蛇は痺れ、怒りに満ちた表情で光に向き直った。

無意識の内に光は口を開く。

「健君、大丈夫！？」

その声に健が応える。

「光か・・・？」

大蛇の気が光に向いたところで、すかさず跳躍し光の横へと並んだ。

「危なかったんだ、助かった・・・痛っ！」

「助かってないよ、その傷！一也に言われたから来ただけで
事情がさっぱり・・・」困惑の表情を浮かべながら光が言った。
光の話には耳を貸さず、伝えるべきことをだけを伝える。
「いいか、よく聞け。お前は、向こうにあるエレベーターに乗って
地下に向かえ。最下層に向かって行けば、途中チビを見つけられる
筈だ」

ここで自動ドアがこじ開けられる音がする。一也と月夜の2人も
研究施設へと辿り着いた。

「今の話の流れからすると、こいつの気を引く役が必要なわけね」
と月夜。尚も続けて、
「あたしが引き受けるわ。3人はエレベーターで地下に向かいなさ
い」
そう言うと、まず、健と一也をエレベーター向けて超高速で投げつ
ける。

「うおわぁあああああ」
「この女は何なんだぁ」
一也、健の悲鳴が響く。続けて、月夜の手が光の首根っこを鷲掴み
にする。
「っひ！」光の顔がこれから起こる恐怖で歪んだ。それに対して
月夜の顔は楽しげに微笑んでいる。次の瞬間、光も投げ飛ばされ、
3人は
エレベーターの中へと見事に収納された。
「行かせるか！！」と大蛇がエレベーターを破壊しようと、突進す
る。

「くっそ！」
一也が防御のために手をかざす。その瞬間、大蛇は床に吸い寄せられそのまま叩きつけられる。身体が地面に押し付けられ、一切の自由が利かなくなった。

「てめぇ！！！」苦悶の表情で大蛇が叫ぶ。

一也は何が起きたかわからなかったが、これ幸いとばかりにエレベーターの開閉ボタンを操作し、エレベーターは動き出した。

一也達が行ってしまうと、大蛇に自由が戻り、月夜へと振り向いた。
「まぁ、いい。あの狼野郎と闘るより、てめぇとの方が楽しめそうだな」
口元をニヤつかせながら、大蛇、巧が言った。

ふっ、と鼻で笑うと月夜が残像を残し、突然大蛇の眼前に現れる。
月夜の蹴りが大蛇の顔へと炸裂し、その巨体が吹き飛ぶ。その衝撃で低い地鳴りが轟いた。

大蛇は首を振り、体を起こす。何が起こったのかわからないままに月夜を見た。
「てめぇの、『それ』は何だ！？」
瞳が揺れ動き、とても混乱している。大蛇の瞳には2枚の漆黒の翼が映っている。それらは月夜の背中から出ているもので、今、月夜は空中に
滞空している状態だった。

月夜は空中から大蛇を見下ろしつつ、冷たい微笑みを浴びせかける。
その笑みは見る人を魅了してしまいそうな程美しいものでもあった。

「同じ呪いでも『格』が違うのよ。でかいだけのトカゲごときに
何かできるとでも思ってたの？楽しむ？笑わせないで」

この台詞で大蛇はキレた。
「だとぉ！？？」
密かに月夜の近くまで忍ばせておいた尾を瞬時に月夜へと向ける。
確実に
当たる距離だったし、大蛇の目には月夜を払う尾の映像が届いていた。
しかし、払ったと思われた月夜の像がブレる。残像だった。
「なっ！？」驚嘆の声を上げる大蛇。

そして、大蛇は最後に自分の後頭部の方から悪魔の囁きを聞いた。

「トロすぎるのよ」

月夜の一撃が後頭部に直撃する。会心の一撃に大蛇は、そのまま
倒れ伏してしまったのだった。

一也達はエレベーターを降りると、地下1階から地下2階へ行くための
エレベーターを探し走っていた。研究施設のエレベーターはややこしい造りで
直通で最下層の地下2階へは行けないようにできていた。

光が弱音をあげる。
「なんで、こんな入り組んでるの～？！」

「もう少しだ、頑張れ光！」と一也。

すると、３人は広い場所へ出た。向けた視線の先にはエレベーターがあり、
階下へ行けることを示している。しかし、そのエレベーター前の広い場所に
１人の女の子がいる。一也らと同じ学校の制服を着ていた。

「えっとぉ、楠君と紺野君・・・？」
女の子、凪は目をパチくりさせながら言った。

「なんで、神谷がここにいるんだ？」と一也。

「構わないで、下に行くぞ！」
健がエレベーターへ向かって走り出した時だった。

「だめっ、行かせない！影法師！！」
エレベーターホールに凪の声がこだました。
言下に、凪の足元から影が伸び、健の影をしっかりとロックする。

健が声を荒げる。
「っく、なんだこれは！？」

「祓い屋のスキルだ。捕まると動けなくなる！」一也が叫ぶ。

「でもさ、僕ら、もう全員捕まっちゃってるんじゃない？」
いつもののほほんしたトーンで光が言った。光の言った通り
一也・光・健の３人の影には凪から伸びた影がしっかりと
くっついており、その場に固定されてしまっている様だった。

「でも、大丈夫」
そう言うと、光が手元で放電し火花を散らせる。
電気をスパークさせたのだった。一瞬ではあるが、一面明るくなり影が消えた。
「今の内に2人は行って！」
光の声に反応し、一也と健は駆け出し凪の横を通過。もう少しで
エレベーターに乗れるというところまで差し迫った。
「あ、もう！！」
再び、凪は2人に影を伸ばすが、その瞬間足元で電気弾が炸裂した。
「きゃっ」
「光、任せた！！」
一也の言葉と共にエレベーターは閉まり、階下へ向けて動き始めた。
泣き目になりつつ、凪が光を見た。
「もう！ここ（研究施設）は依頼沢山くれるお得意さんなのに、
後で怒られちゃうじゃん！」
「そういうわけで、凪ちゃんはここにいるんだね」
と、しどろもどろになりながら光。
凪は涙を拭いながら、
「こうなったら、紺野君だけでもやっつける！！」
と、光へと影を伸ばす。あっさり、捕縛されてしまう光。逃げる様子も
全く見せなかった。
「あのさぁ・・。言いづらいんだけど」

影に捕まり圧倒的不利な状況な中、光が口を開いた。
「なによ！？」まだ拗ねている口調で凪が言った。
足元には影が蠢いており、祓い屋としてのスキルはしっかり
持っていることが窺えた。
それだけに、光がこれから言うことは、とても言いずらい事だった。
「僕達のスキルって抜群に相性悪いと思うんだけど・・・」
不利状況に置かれながらも、申し訳なさそうに光が言った。次の瞬
間、
手元で電気をスパークさせ、辺りを光りで満たした。結果としては
当然、影が消滅し、光を捕縛していた能力も解除される。
その光景を目の当たりにし、落胆の声を上げる凪。
「そ、そんな～。うぅ・・・」
再び、瞳を濡らして、その場にへたり込んだ。
頭を掻きながら、気まずそうな表情で立ち尽くす光の姿があった。

地下2階、大きな扉を蹴破り入ると、そこには3人の人間がいた。
1人は真奈美で、椅子に身動きをとれないように座らせられている。
頭から顔を覆うヘッドセットをつけ、映像・音楽共に何か刺激を
与えられている様だった。抜け出そうともがいているのがわかる。
そして、残りの2人。緋色という女性と蔵元だった。
目を見開きながら、
「先生・・・？なんでここに？」と一也。

蔵元は笑みを浮かべた。数時間前に見せた、あの人当たりの好い笑みだ。
「ちょっとした、実験中でね」
傍らで暴れる真奈美を見ながら言った。

「ふざけるな！！」
勢い良く、健が真奈美についているヘッドセットなる装置を破壊しにかかる。
しかし、健に凄まじい風圧がかかり、壁へと押し当てられてしまった。

「実験の邪魔はダメだよ、狼君。君の呪いも興味深い・・・」
腕を組みながら、蔵元が言った。

感情を高ぶらせながら、一也が
「一体何の実験だよ？！そんな小さな子を使って！」

「この子のスキル『脳内投影』（マイワールド）の次なる段階だよ」
大仰に天を仰ぎつつ言った。

「脳内投影・・・？」
「マイワールド？」
一也、健が呟く。

「んん？」と言う風に蔵元は眉根を寄せる。
「君たちも、この子の知り合いなら、何か特別な現象が起こる事位体験済だろう？そのスキルの発展を今促しているんだよ」
2人は目を点にして、聞いていた。それを見て、蔵元は説明を続け

る。
「何でもいいんだよ。ほら、身体が動かなくなるとか、物が勝手に浮くとか・・・」
身振り手振りで説明する。
一也にしては健と戦った時に急に身体が動かなくなる時があったのを覚えていた。健にしては目の前で大蛇が浮かび上がるという事も目の当たりにしている。
「全部、チビのスキルだったのか・・・」健が呟いた。
それを聞いて、
「ん、どこか思い当たる節があった様だね。そう、この子は自分の脳内を現実に投影することができる。
ｍｙ－ｗｏｒｌｄとはそういう能力だ」と蔵元。
「しかし、幼い故に、精神も未発達で自由自在という訳にはいかないがね」
最後に溜め息をつきつつ、説明を加えた。
「だからって、それをどうするんだ！？」一也が声を荒げた。
真剣な顔つきになり、人の好い笑みは消えた。
「世界の争い、戦争・抗争をなくせるとは思わないかね？」
尚も蔵元は続ける。
「私が医者だった頃、抗争の絶えない国にボランティアの医師団として
派遣されたことがあってね、もちろん自ら望んで行ったんだ。」
目はどこか遠くを見ている様だった。遠い場所に思いを馳せている様子である。
「そこで、不運が『彼女』を襲ったよ。彼女は流れ弾に足をやられた

少年を助けようと、銃弾の飛び交う公道へと飛び出した・・・
銃撃戦は程なくして、止んだが、彼女はもはや息はなかった」
ここで、吐息をつき、一呼吸おいた。
「それから私は私を呪ったよ。あの時飛び出して一緒に死んでれば悔いなんて残らなかったんじゃないか。自分に何かしらのスキルがあれば、彼女を助けてやれたんじゃないか・・・。自分の無能さに死にたくなった」

「それと、これとは別だ、チビを放せ！」
風圧に抗いながら健が口を開く。

「いいや、この子の能力が私には必要なんだ。私が平和な世界を創世する！！そのためにもこの子には戦争があるという『現実』を目で見て、耳で聴き『自覚』してもらわねばならない。
そして、それを無くしたいという深層心理での『強い願望』が必要だ。
それこそが『脳内投影』の条件だ！」
蔵元がらしくもなく、乱暴な口調で言った。
「しかしながら、先程も言ったように、この子の精神は未発達で戦争の『現実』を植えつけただけで、『脳内投影』が発動するかはわからない。そこで私のスキルを使う」

「え、先生、スキル持ちじゃないって言わなかったか」
目を見開きながら、口を開く一也。

「確かに、俺もそう聞いたぞ」と、健も続いた。

「私は自分に能力なんて無いと思っていた。脳波・精神鑑定・夢のパターン
・・・その検査で私の検査結果はめちゃめちゃなものだったんだ。

一般人のそれともスキル持ちのそれとも違う。だから能力なんて無いと
私は思い込んでいた。君ならわかるよね、一也君？」
一也にも似たような体験がある。似たというより、まさしく同じものだ。
「それって、未だ解読されてない検査結果パターンじゃ・・・？」
一也が緊張しながら話の後を促す。自分が酷く緊張しているのがわかった。
「なぜ、規則性と外れた検査結果パターンが出るか。私はある１つの仮説を立てた。今、その答えが出る・・・」
そう言うと、緋色に蔵元は合図を送る。それに応えるように
緋色は一也に向けて、強風を当て付けた。風圧に押され、健同様
一也も壁に押し付けられ、身動きが取れなくなってしまった。
「一也・・・！！」健が隣で心配そうに叫ぶ。
「くっぐあ！」
一層強い風圧を送り込まれ、呼吸もままならず、一也の顔は苦痛で歪んでいく。腕を前に出し、防ごうとするが身体が言うことを利かない。
頭が白くなり、意識が飛びかけた頃だった。風が不意に止んだ。
咳き込み、大きく呼吸する一也。今風は緋色と一也の両者の中間点で激しくぶつかりあっている。この影響で、健も風圧から解放された。
「これは・・・」緋色が無表情のまま呟く。
それを引き継ぐように蔵元が口を開いた。

「そう、緋色の風圧砲に対し、一也君も同じ能力を
同じ強さで同じように発動させたんだよ」
蔵元は拍手をしている。一也に対してだ。
「これで証明された。一般人の規則性にもスキル持ちの『既存』の
規則性にも属さない規則性を示す者も立派なスキル持ちだ。
規則性を示さない規則性・・・これもスキル持ちの一種の規則性だ。
検査結果のパターンに革命を起こす、素晴らしい発見だ」
呼吸を整えながら、一也が訊く。
「ど、どういうことだ・・・？」
隣にいる健が口を開いた。
「そういうことか」
驚愕で目を見開く。

「話の続きをしてあげよう」と蔵元が話し出す。
「私の立てた仮定とは検査結果で規則性を示さないのは
『その者のスキルが誰か別の人間の能力に依存するのではないか』
というものだ。そして、スキル持ちでない君は今！
緋色の風圧砲に同等する威力の風を逆風として相殺している。
思い返してごらん、近くにいる人間の能力を自分のものとして
使ったこととかあったんじゃないのかな？」
確かにこれまでに、一也自身、光の電気を使用できたことがある。
そして、先程、大蛇を地面に這いつくばせた能力は、港のスキルの
『反重力』なのではないか。そんな考えが頭を過ぎった。
一也の様子を窺いつつ、蔵元が
「どうやら、そういう経験があるらしいね」と言った。

腕についた時計を見つめ、蔵元は真奈美に近づく。
「そろそろ、私のスキル『精神乗っ取り』－ｍｉｎｄ　ｊａｃｋ－を披露してあげよう。私も規則性を持たない人間でね。他人依存型のスキルなんだ」

そして、蔵元が自分のスキルを発動しようとしたところで室内に銃声が響く。
「な・・に？」
弾丸は蔵元の腹部に命中し、蔵元は血の海に跪いた。汗を滴らせ苦悶の表情を浮かべる。
「ｍｙ　ｗｏｒｌｄの暴走か・・・」

「蔵元さん！」緋色も普段に見せない慌てぶりで蔵元に駆け寄るが２発目の銃声が室内に響き、緋色も倒れてしまう。
続けて、銃声が響き、それらは一也・健に放たれたものだった。
しかし、健の反応が良く、一也を抱えて避けることに成功する。
２人は研究機材の物陰に隠れる。

部屋には迷彩服と言った、戦争現場に見られる格好をした人間が数人存在していた。今までは存在していなかった人間だ。

「これが『脳内投影』・・・？」一也が口を開く。

「らしいな、これはまずい。戦争をなくすどころか
これだと、戦争が拡がる方に行っちまう。とりあえず、チビに着いてる機材をぶっ壊して助け出そう。この現象が止まる可能性がある」

一也と健は無言で頷き合うと、健は物陰から飛び出した。
当然、部屋に点在する兵隊は健に向けて銃を構える。

「させるか！」
銃を構えた兵士達に向けて、一也が強風を送り込む。
兵士達は風圧に耐えかねて次々へと飛ばされていく。

「おらぁ！！！」
健は真奈美に装着されている機械を破壊し、真奈美を抱きかかえた。
今や、真奈美は戦争の映像プログラム、音を聞かされており、それに耐えかねて、気を失ってしまっている様子である。
「どうだ、『脳内投影』は止まったか？！」
健が一也に振り向いた時だった。乾いた銃声が響き、弾道は健の足を貫いた。
「ぐあっ！なんで止まらねぇ！？」
膝からガクっと崩れ落ちる健。

一也の風圧に当てられながらも、兵士達は健に向かって銃で狙い定め、トリガーを引いた。乾いた銃声がいくつも響き渡る。
健は目を伏せた。抱きかかえている真奈美を守ろうと、強く抱きしめた。

「健ー！！！！」
一也の悲痛な叫びが轟く。健を庇おうと、銃弾と健の間に飛び込んだ。

1秒2秒・・・・5秒。一也の身体に痛みが伝わらない。
「あれ・・・？」キョトンした様に一也が口を開く。
周りを見渡すと、兵隊達は消えている。

「あいつらは、どこいった？」健が警戒を解かずに訊いた。
「さぁ、いなくなったな」と一也。
ここで一也は健が自分を見つめていることに気付いた。
「な、なんだよ？」
健が悟ったように口を開く。
「これは『脳内投影』による『脳内投影』の打ち消しとしか思えない」
急に顔を明るくして、真奈美を抱えたまま、一也の肩をバンバンと力強く叩いた。
「お前のお陰だ、やったな一也！！！」
撃たれた足に痛みがないのか、ピョンピョンと飛び跳ねている。
「なぁ、健、足大丈夫なのか？」
「痛えぇーーー！！！」
建物中に、地下から地上まで健の叫びが届いた。

私の世界～後編～（後書き）

次のエピローグに話をまとめようと思います。
思いのほか長くなってしまいました。。。
読んでいただき、ありがとうございます！
感想もどんなものでもお待ちしています！！

私の世界～エピローグ～（前書き）

これで終わりです。後日談的な話です

私の世界～エピローグ～

「体の具合はどうですか？」月夜が気遣うように訊いた。

「あぁ、急所は外れてたし、問題ないですよ」
と、いつもの笑みを浮かべながら蔵元が答える。

「あの血の海に沈んだ時は、俺も焦ったぜ～」
一也が、大きな吐息を１つついた。

緋色は蔵元の隣のベッドで３人のやりとりを聞いているだけだった。
一也、月夜は警察の監視の下で入院中の蔵元の所へやってきている。
蔵元はベッドで上半身を起こしていて、その隣には一也と月夜が
並んで座っていた。２人はある事を訊くためにやってきたのだった。

「一也君、最後に君は『脳内投影』が消えた、と言ったよね？」

「はい、弾丸が俺に当たりそうになって・・・それで」

「ふぅむ」と顎にを手をやりつつ、何かを考えている様子の蔵元。
「やはり、それは君の友達の言う、『脳内投影』による『脳内投影』
の
打ち消し、というのが最も有力な考え方だね」

一也は１番知りたくて、聞きたい話の確信に迫る。
「じゃ、じゃあ！・・・俺にも能力があるってことですか？」

少しの沈黙があり、間が開いた。少しして、蔵元が
「検査結果に規則性の見られない者も『スキル持ち』ということが

わかった今、君は既に立派な能力者だよ」と優しく微笑んだ。
「しかし――」蔵元は話を続ける。
「この規則性のない人間は世界でも、少数しか存在しないだろう。現に私は、こんな結果パターンをもたらす人間を自分と君しか、知らないのだからね。だから、どんな能力かはわからないが」

「やっぱり、そうですよね」と一也は肩を落とす。

「そうがっかりするな。あの時に言った通り、君の能力は他人依存型のものっていうことは確かだ。しかし、今は何も使えない。そうだね？」

無言で一也は１つ頷いた。

蔵元は緋色の方を一瞬見てから話を始める。
「私の－ｍｉｎｄ　ｊａｃｋ－も『今』は緋色の持つ風の力しか使えない。
なぜだか、わかるかな？」と、一也に質問を投げかけた。

う～ん、と唸りながら一也は頭を掻いた。
「いや、さっぱりわかりません」

「私の能力発動の条件下に存在するのが緋色だけだからだ。
－ｍｉｎｄ　ｊａｃｋ－はその名の通りに『他人の能力は乗っ取る』というもので、対象が有効半径内に存在してくれないと、この『精神乗っ取り』は発動できないんだよ。そして、乗っ取られた側は有効半径に入る限り、能力を使えなくなる」
と、蔵元が自ら能力を説明してくれた。

現代社会において、スキル持ちが自分の能力を他人に知られると

不利益なことしか起きないために、あまり自ら喋る事はない。

「しかし、一也君が風圧砲を使えた時に緋色も同じく
スキルを使っていたのを見ると、私の能力とは同タイプだけど
違う部分も多そうだ。そして、能力発動にも条件が、それなりに
付いているものらしい」
厄介そうに顔を歪めて、蔵元が言った。

一也がいきり立ち、手の平を見つめた。
「今から、電気を起こしてみせる！！」

しかし、何も起こらない。月夜の溜め息がこぼれた。

「じゃあ、今度はあそこの花瓶の花！あれを浮かせてみせる！！」
花瓶に向かって手の平を向ける一也。

もちろん浮かない。花瓶にはお見舞いで貰ったのか沢山の花が
飾られていて、咲いている花、まだ蕾のままの花等があった。
それらが部屋中にあった。そのお見舞い用の花の多さが来客者の
多さと共に蔵元の人望をも表していた。

やけくそ気味に一也が叫んだ。
「何でもいいから、起こってくれよ！！！」

すると、部屋中にある蕾のままの花が、急速に成長し
花を開かせるまでに到った。その光景は見るものを
圧倒させた。部屋の中は一気に花の心地よい香りが満ちた。

「これは・・・？」月夜は驚きながら部屋中の花を見渡している。

緋色も何が起こったのかわからず、部屋中をきょろきょろしていた。
「君の持つ花のイメージとは、『咲き誇り美しい姿』というものではないか？」
と、蔵元が訊いた。どこか高揚しているのがわかる。
「花ってのはパーって咲いてて綺麗な物だなぁってイメージですね」
と、ぶっきらぼうに答える一也。
「それだ！これは『脳内投影』だ！君の持つイメージ、つまりは『概念』を花達に投影したものだ！」蔵元が声を上げた。
「でも・・・」ここで月夜がポツリと呟き、
「『脳内投影』を持ってれば電気も浮遊もできると思うのですが・・・」
と、疑問を口にする。
「そう、理論上『脳内投影』で不可能なことはない。が、この能力は使用者の深層心理にとても強く依存している。心のどこかで、発電や浮遊は
『自分の能力ではない』と思ってしまったのだろう。『概念』がなかった
ということだ。だから電気は起きないし花も浮かなかった。」
「そして、ここで、また1つ仮説が立てられる」蔵元が口火を切る。
「やはり、君の能力は『複製』だ。そして、その発動条件だが
『最後に“体感”した能力』が使えるというものではないだろうか」
「面会時間終わりますので、そろそろお帰りくださいね～」という
看護士さんの声が病室にした。

「いいところだったのに！！」一也が絶叫する。
「諦めなさい」冷ややかな月夜の対応だった。
2人は蔵元、緋色に頭を下げると、病室を後にした。暗くなり始めた道を歩きながら2人は家路に着く。
「そう言えば、あの大蛇はどうなったんだ？」
「睨んだら逃げたわ」
睨むだけで逃げるとは思えないが、月夜にだったら充分有り得そうな話でもある。一瞬、一也がかたまった。
「冗談よ、騒ぎが収まって、警察が来てる頃には姿を消してたわ。逃げたっていう表現は、あながち間違っていないわね」
艶のある豪奢な茶色がかった長い髪を払いながら、月夜が言った。
「神谷もいたけど、光は『戦わずして勝った！』なんて言ってたしな～」と一也。
「なんで、あの女がいるのよ」
「あそこの研究施設から祓いの依頼をよく受けてて、今回もそれで居たんだってさ」頭の後ろで手を組みながら一也が言った。
「ふ～ん」興味無さ気に月夜だ。

こうして、２人は自宅に帰った。一也にしては自分が能力者
であるということがわかり、とても良い一日になったのだった。

私の世界～ＥＮＤ～

私の世界～エピローグ～（後書き）

よんでいただきありがとうございました！！

光の災難な1日（前書き）

一也の能力お披露目&光について書きたくて
書きました。よければ読んでくださると嬉しいです

光の災難な1日

ある日のこと、光は銀行にいた。親が海外へと派遣されているため
お金のやりとりは銀行を通すことになっている。
いつも通り、手際良く入力し、今月分の生活費を引き出している
ところだった。突如、銃声が鳴り響き、遅れて女性の悲鳴が聞こえ
た。

「全員、頭の後ろで手を組んで、跪け！！！お前はこれに金を
ありったけ詰めろ！」と、受付の人間に言いつつも
銃を天井に向け、続けて2発3発と弾丸を発射する。
やや長めの銃身で、犯人自体も重そうに持っていた。

いかにも、銀行強盗です！と言わんばかりに格好をしており、
顔には覆面を被り、目と口の所には穴が開いていて、前を見れる様に
できていた。そのありきたりな格好に光は小さく笑ってしまう。
それに気がついたのか、強盗の足が光へと向かった。
気まずそうに光は目を伏せて、視線を下へと向ける。すると、頭上で
銃を構える音がした。頭に何かが当て付けられるのを感じる。

「お前、今何か笑ってたよなぁあ！？」

一触即発の事態とはこういうことを言うのだろうか、等と光が考え
ている。
犯人に応えることもなく、光は突き付けられた銃口へ電機ショック
を流す。

「ぐっあ・・・！」

強盗は白目をむいて悶絶した。残った電気のせいか、時折、強盗の体が
痙攣しているのがわかった。
その様子を見て、光は痛そうに顔を歪める。
「ちょっと強すぎたかな」
一瞬、光の視界がブレた。視界が一気にぼやけ、体を前へと吹き飛ばされる。
朦朧とした意識をなんとか繋ぎ止め、痛みが走った後頭部に手を当てつつ
振り返った。
「痛た・・・」
「お前、何かの能力者だな？」
下衆な視線で光を見下ろす男がいた。こちらは覆面は付けておらず、銀行に一般の利用者として来ているかの様な服装だ。どこも怪しい部分は
見当たらないが、その目だけは、男の本質を語っていた。
男は、金を入れる手が止まっている受付の人間へと怒号を飛ばす。
「ぼさっとしてないで、金を早く詰めろ！！」
受付の人間は弾かれたように、動くのを再開した。
再び、銀行内は恐怖で支配された。聞こえてくるのは、泣きすする声や
それを安心させまいと気遣う者の声だけだった。
「お、お兄さんも強盗さん？」

まだ残る痛みに口の端を引き結びつつ、光が訊いた。
「言う必要はねぇな、お前はここで殺すからだ」
男は胸ポケットから先程の強盗は違ったコンパクトなサイズの銃を取り出す。
それを光に向けると、引き金を躊躇なく引いたのだった。
乾いた銃声が轟き、続いて薬莢が床に落ちて高い音がした。
光は顔を逸らし、目を強く閉じた。男と光の距離は2～3メートル程。
この距離で弾丸を電気で打ち落とす芸当などできる筈もなかったからだ。

（撃たれたのに、痛みがこない・・・？）

ゆっくりと、目を開き、正面へと向き直る。放たれた弾丸は空中でふわふわと停滞している。綿飴のように、雲の様に軽い動きで光の目の前で浮かんでいた。やがて、それは地面へと力なく落ちた。
この現象に男は狼狽をあらわにしながら口を開く。
「な、なんだこれは！？こんなこともてめぇはできるのか！？」
もちろん、光の能力ではないし、応用したところで『物の動きを止める』
なんて言う事は実現不可能だ。光自身も、目の前の不思議な光景に首を傾げた。
「『脳内投影』・・・初の実践投入にしちゃ、上出来だな！」
光の聞き覚えのある声がした。長年連れ添った親友の声だ。

「一也！！」

歓喜に満ちた声で、その名を呼んだ。当の本人、一也は笑顔で光に応える。

不意を突き、男が再び銃を撃った。2人に向けて、まばらに乱射した。

しかし、そのどれもが不可視の壁にぶつかると、そのまま地面へと落ちていく。

「な、なんで当たらないんだ！？？」

男のうろたえる様子を見て、にやり、と一也の口元が動いた。

そして、口をゆっくりと凄みを携えて開くのだった。

「弾丸と同じように、お前の寿命もここで止めてやろうか？」

悪魔の笑みを浮かべつつ、言い放つ。

男は、そのまま卒倒した様で、力なく倒れこんでしまった。

突如、銀行内が歓声で満ち溢れた。人々は抱き合ったり、嬉し泣きをしていたりと、恐怖から解放され喜んでいた。

「それにしても、助かったよ。撃たれた時は終わったって思っちゃった」

大きく吐息をつきつつ、胸を撫で下ろす光。

本当に危機に直面していた様で、冷房の効いた銀行内だと言うのにその額には汗が浮かんでいた。

「俺も、犯人が2人って知った時は焦ったよ」

頬を掻きながら、焦りを隠しつつ一也が言った。

一也の気まずそうにしているところを見ると、助けられるかどうか自信がなかったかの様に窺えた。

そんな一也の様子には目もくれず、光が腕を組みながら
「それでも、すごいよ。今の・・・『脳内投影』だっけ、一也の能力だったんでしょ？」と、訊いた。

「俺の能力の本質は『複製』って言うらしいんだ。まだまだ謎の多い能力で詳しくは俺にもわからない」と肩をすくめながら一也が答える。ついでに、溜め息もこぼす。

「じゃあ、今のは・・・？」光は視線を向け、話を促した。

コホンとわざとらしい咳払いを1つ。どこかの偉い学者の様に口を開く。
「今のは、ある女の子の、理論上、完全無欠の能力だ。それを『複製』で俺が使ったってことだ。でも、俺と『脳内投影』の深層心理での精神のシンクロができていなくて、まだ物を止める程度しか
できないんだけどな。それも少しの時間だけな」

「その女の子って、かなりやばい存在なんじゃ・・・？」
訝しげに眉根を寄せ、光が訊いた。

「本人も幼くて、精神が発達してないから、能力を危ない方向へと使うこともないんだとよ。それに『スキル持ち』という自覚も持ち合わせていないらしい」

「そうなんだ～」と光が興味津々と言った様子で聞いていると

自動ドアが開き、ようやく警察の人達がやってきた。

犯人の男2人は、それぞれ手錠をかけられると連行されて行き
ようやく、強盗事件は幕を下ろすこととなった。
やがて、再び業務を再開した銀行内で声がした。

「一也、今回はありがとう」

「ま、気にすんなよ」

2人もこうして、銀行を後にしたのだった。

光の災難な1日（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました！
色々と物語に説明を加えたくて書いたもので
おかしな部分とかあると思います。その事も踏まえて
感想を頂けたら嬉しいです

呪い狩り編～序章～（前書き）

新展開です。

呪い狩り編～序章～

やや暗くなり始めた住宅街の道を歩く少女が1人いた。茶色がかった艶やかな髪を持ち、その長さもあってか、とても見栄えが良かった。ぽつぽつと電信柱の明かりが点き始まり、辺りは本格的に暗くなっていく。
暗く静かな所を好むのか、少女の足取りは軽く、どこか上機嫌である。

しかし、その軽やかな歩調がぴたりと止まった。
外灯の光の下に1人の男が立っていたからだ。上から下まで真っ黒なスーツを着用しており、まるで、その少女が来るのを待って居た様だった。
最初に切り出したのは男の方だった。

「呪い・・・持ちの方ですよね？」

丁寧な口調だが、低みのある声だった。外灯に照らされた男の顔は細面で、肌の色は色白だった。なかなかの長身で、中性的な顔をしている。
やや長めの髪は目にかかっているのだが、その視線がはっきりと自分に
向けられていると少女は感じていた。高圧的な態度で月夜が答える。

「だったら、何なのかしら？」

男は微笑すると、その表情に似合わない台詞を口にする。
ゆっくりした口調だったが、言葉の意味成すところははっきりとし

ていた。

「呪い、には消えていただきます」

言い終わると同時に、月夜に向けて手を振る。何かを投げる手つきだった。

その『何か』は外灯の光に照らされ、きらきらと反射している。月夜は

顔を横に逸らしつつ、横目で通り過ぎ去り行く『何か』を見た。

「針？」

針の様な、それはブロック塀に突き刺さっている。針のように細いのだが

家と道を隔てるブロック塀にしっかり突き刺さっており、その頑強さが窺える。

目線を男に戻し、意志の強そうな瞳が怒りをあらわにした。

「覚悟はできてるんでしょうね・・・」

月夜が歩くたびにローファーが地面を叩き、規則良いリズムがする。そのリズムは

ゆっくりとしたものだったが、確実に男へと迫っているものだった。

男は困ったように、頭を掻いている。しかし、依然として余裕が有りそうな態度で

逆にこの事が月夜の怒りを爆発させることになった。

ローファーが強く1回地面を蹴った。その音を置き去りにし、月夜は一気に男との距離を詰める。男は目の前の出来事を把握出来てるのか、否かは

わからないが、棒立ちのまま立ち尽くしている。

月夜は手加減することなく、男の首目掛けて手刀を放った。
その瞬間とも言うべき僅かな時間だったが、目にかかっている髪を手で払う男。
視線はしっかりと月夜に向けられていた。

「気付いてても、遅いわ！」

かまわず、手刀を振りぬく。しかし、恐るべき俊敏さで右足を半歩退くと
身をよじって手刀をかわした。前傾姿勢になっている月夜目掛けて、退いた右足の
膝が繰り出される。それを左手で受け流すと、そのまま男の背後へと跳んだ。
振り向く前に風切り音がし、反射的に横へ身を投げた。横へと回避しながらも
投げられた針は目に捉えていた。顔の数センチ前を通過して行き
男の狙いの正確性を物語っていた。

「これも避けるか。妖怪や幽霊と違って、人に宿った呪いは厄介ですね・・・」

口を引き結び、腕組をしながら一連の流れの感想を述べる。

「質問ですけど、君の祖先は一体どんな生物にちょっかいを出したんですか？」

月夜は眉根を寄せて男を見やった。攻撃を仕掛けてくる風でもなく、男は純粋に
質問している様だった。前髪に隠された瞳が輝いている。どうやら、
『呪い』

というものに、強い興味を持っているらしい。
返事をしない月夜に男は質問の意味が通じてないと思ったのか、首を傾げる。
当の月夜は、男をただ観察していただけなのだが、親切にも
質問の仕方を変えてくれた。

「どんな生物に呪いをかけられたのですか？」

「答える義理はないわね」

間髪入れずに答えた。ついでに、冷ややかな視線を思いっきり浴びせてやる。
男は肩をすくめると、溜め息をこぼした。どこか残念そうな表情をしており
本気でがっかりしている様子である。

「種の存続を保つために、殺される間際に相手を自分と同じ種類の生物にする。
でも、それは変身によりオンにもオフにもできてしまう。呪いをかけたのに、
呪いをかけられた家系は生物的に強くなってしまう。皮肉なもんだよね、
君はそう思いませんか？」

独白の様な台詞は、最後は問いかけへと変化した。月夜に隙を作らせるために
言った言葉ではないだろう。証拠に、男はだらんと両手をぶら下げ、まるで
戦意が無いかのごとく、そこに立っているだけだった。

「別に思わないわよ。便利って言えば、便利だけど」

言い終えると、月夜は右手親指の関節を景気良く鳴らした。
再び、男へと急襲をかけるために駆け出そうとした時、手の平が
向けられていることに気付いた。男はうつむき加減に下を向いており
何かぶつぶつ言っている様であった。

「今日は私の負けでいいです。大人しく引き下がります」

「は？」

らしくもなく、素っ頓狂な声を上げてしまった。目も見開いている。

「えぇ、ですから・・・」

次第に男の身長が低くなっていく。

「今日のところは引き下がります」

良く観察していると、小さくなっていっているのではなく、足元へと
沈んでいっている様だった。今では下半身はすっかり沈んでいる。
苦笑しつつ、尚も男は続けた。

「手持ちの祓い道具が尽きてしまいましてね」

脊髄が反射的に身体を動かした。完全に沈みかけている男の頭目掛
けて
得意の右拳を放つ。しかし、路面を穿つだけで終わってしまった。
辺りを見回すと、すっかり男の姿は消えており、どこにも見当たら
ない。

「呪い持ちの方を見くびっていました。次回はこうはいきませんよ」
その声は月夜自身の影が喋っているかの様に足元から聞こえてきた。

洋風の質素な部屋だった。しかし、天井は高く部屋自体は広い作りになっている。
大きな両開きの窓にレースのカーテンがかかっており、時折入ってくる風で
心地良さそうになびいていた。見てると、涼しさを与えてくれる様だ。
ベッドに机に、やや長方形のテーブルの周りには４つほど丸椅子が置かれている。
机が面している壁一面が本棚になっており、ぎっしりと本が詰まっていて、
部屋の主の博学さを物語っている。
突如、床から人がゆっくりと出てきた。床の黒い円から少しずつ、その身を
縦へ縦へと出現させている。全身が出ると、男の足元の黒円はいつもの
影へとなった。
「ふぅ・・・」
疲れが出たのか溜め息をもらし、ベッドへ身を投げる。
しかし、その顔は喜々としていて、心地よい疲労を感じている様子だった。

仰向きに寝っ転がると、切れ長の目を細め天井を見つめる。その姿は絵になっており、この場に女性がいたのなら見惚れてしまっていることだろう。
そこへ、扉をノックする音がした。遠慮する様な小さなノック音だ。元から部屋が静寂に包まれていたこともあり、その程度の音でも充分すぎる程
よく聞こえた。扉の方には向かず、天井を見つめたままの男が返事をする。

「どうぞ」

やや間が合って、ゆっくりとドアが開く。入ってきた者は入り口の側にある
スイッチを押し、部屋の電気を点けた。淡いオレンジ色の光が部屋を照らす。
男は眩しそうに手をかざし、目を細める。

「凪か・・・？」

「電気くらい点けなよ～」

あどけない女の子の声がした。困り顔を作り、今は男の前に立っている。
髪は男の様に短いが、ぱっちりと大きい目に、その優しい声音から女の子であると誰もがわかる。男は、そんなことを考えながら見ていた。

「何か疲れてそうだけど、大丈夫？」

気遣う様な声と共に凪が顔を近づけてきた。近くで見れば見るほど

ぱっちりとした目が可愛らしく見える。その目をぱちくりさせながら心配そうに男を見ていた。

「あぁ、ちょっと親父殿の例の依頼のことでね。３人分だけ祓った。最後の１人は無理だったけど」

聞いた瞬間、凪の顔が驚きで歪み、大きい目を更に見開いている。悲しそうな顔で口を開く。

「お兄ちゃん、あの依頼本当に実行してるの？そもそも、あれは・・・」

男は目をつむり、憂い顔で後を引き取る。本人もどこか、納得して居ない様な表情で、眉根を寄せている。

「わかってる。相手は人間だし、殺せば犯罪だ。だから、気絶させて呪いだけを『祓う』。親父の命令とは違うけど、これでも依頼はこなしている・・・ことになっている」

どこか屁理屈じみた言い方だったが、凪を安心させるには充分だった様で、一気に顔が明るくなった。

「それなら良かった！」

「逆にお前は依頼しっかりこなしてるのか？」

凪は首を傾げ、考え込む。目を上に向け思考をめぐらせている様だった。

「呪い持ちの人の区別ができなくて・・・」と、恥ずかしそうに答

えた。

「そうか」

男は、どこか安心したように吐息をつくと、再び天井に視線を戻した。

それから2人は他愛のない話をして過ごした。丁度世間では夏休みが始まろうとしている時期である。

しかし、神谷の一派を筆頭に、ある計画が進められていた。それは夏休みの始まりと共に本格的に始動することになる。

呪い狩り編～序章～（後書き）

読んでいただきありがとうございました！！

呪い狩り編～その1～

2人は公園のベンチでだらけていた。それもしょうがなく、朝からうだるような暑さなのだ。涼しい場所を求めて家から脱出した所で、ばったりと2人は遭遇したのである。そして、無言で頷き合うと安らげる安息の地を求めて、歩き出したのだった。ようやく、木陰の涼しそうなベンチを見つけ出すと、すぐさま占拠した。長めの背もたれ付きのベンチを悠々と2人だけ独占する。公園では夏休みのせいもあってか、昼間から小さい子達がはしゃぎ回っている。猛暑の中、走り回る勇ましい姿に呆気に取られながら一也が口を開いた。

「あいつら、あんな走り回って暑くねぇのかな・・・？」

ガックリうな垂れた頭をゆっくりと持ち上げると、光は今にも逝ってしまいそうな目線で子供達を見やる。暑さのせいなのだが端から見れば、とても危ない人間に思われたことだろう。程良くお洒落に天然パーマがかった髪も汗でべっとりとしていた。普段は活き活きしている顔も今や、危ない人の顔になっている。

「元気だねぇ～。僕は、もう・・・」

声も危ない。そして、またガックリとうな垂れてしまった。勢い良く隣に座る光に向き直ると、一也は叫んだ。

「ひ、光！頑張るんだ、生きろ！立ち上がるんだ！！」

少年漫画でありがちな台詞を放つと、光が力もなく答えた。口をパクパクさせており、酸欠の金魚の様で弱々しさが窺える。

「ぼ、僕が死んでも、お前は生きろ・・・！うっ！！」

ふざける余力があるらしく、まだ大丈夫なのだろう。しかし、その顔つきだけは危ない人のままであった。そのうち口から魂が飛び出していくのではないかと疑った一也である。そんな2人の目の前に人影が現れて、一也が正面を向く。光は力もなくずっとうな垂れている。何やらぶつぶつ言っている様子で、実は危ないところまで来てるのかもしれなかった。

目の前にいたのは月夜で、実に爽やかそうにしている。夏？汗？何それ？そんなことを言ってもおかしくないくらいだった。月夜に限って、そんな意味不明な発現はしないだろうが。この暑さの中、黒のワンピースを着ている。すらりと伸びた四肢の色白さが合わさって見る者を惹き付ける美しさがあった。地味な服装なのだが、月夜が着ていると地味とは言えなかった。

「そこに混ぜてもらうわ」

そう言うと、光の首を引っつかみ、一也へとパスした。パス、と言えるくらい軽々しく放ったのである。

「ぎゃっ」
「おわっ」

投げられる者と受け取る者の声がした。空いたスペースにゆったりと月夜が腰を下ろす。元々涼しげな様子だったのだが、木陰のベンチというシチュエーションを得たことで、尚一層のこと涼しさ力がアップした様だった。

投げられた光はと言うと、一也の隣で背もたれに背中を預け、顔は

真上へと向けている。両腕を大きく開き、背もたれの後ろでぷらぷらさせていた。顔を上に向けていることで、さっきより表情が見えるのだが、やはり危ない人の顔になっている。

「それにしても月夜ちゃんは涼し気だよね～」

「そんなことより」

月夜は光の話をぶった切ると、腕組しながら不機嫌そうに話し出した。何かあったのだろうか、とてつもなく怒っていることがわかる。いつもの不機嫌だろうと一也は思ったのだが、話を先を促す。

「で、月夜どうかしたのか？」

「昨日襲われたわ」と、ぶっきらぼうに言った。

「え？！」

「え？！」

見事に一也と光の声が重なり、2人して顔を見合わせた。今まで死人の様な顔をしていた光の顔に活気が戻り、興味津々と言った感じである。襲われた、と言うと危ない意味に取れるが月夜の場合は別だろう。もちろん2人は、そこらへんの意味はしっかり汲み取っている。

「大丈夫だったのか？（相手の人は）」

一也が気の毒そうに訊いてあげた。心配そうな顔をしていて、月夜相手に襲撃を仕掛けてしまった人を本当に憂いでいる様である。光は無言のままだったが、その目は復活していて、いつもの輝きを取

り戻しており、早く続きを話してよ、と視線を放っているのだった。

「上手く逃げられたわ、思い出すだけでもムカツク！」

右足で地団駄を踏み、とても悔しがっている。逃げられてしまったことが、よっぽど悔しかったのだろう。

「それならよかったね。何も被害がなかったんでしょ？（相手の人に）」

光も同じように訊くが、もちろん気遣うべき人間は相手の人である。月夜の怪力さ加減は知っているし、この場合は加害者が被害者に成ってしまう。安堵の表情で訊いたのだったが、月夜のプライドに触れてしまった様だった。

「良くないわよ、返り討ちにしてやるのがポリシーなのよ」

返り討ちをポリシーに持つくらい襲撃を受けるのかはツッコミを入れないとしても、大分危ない女の子だ。苦笑しながらも一也は改めて、月夜の怖さを実感した。不用意な発言をしてしまった光は蛙を射抜くがごとき蛇の眼光で睨まれていた。月夜としては、そこまで睨みを利かせている訳ではないのだが、端整な顔立ちの人間が、そういうことをすることで大分威力がある様だった。光も負けじと視線に視線をぶつけている。う～、等と唸り声を上げているがさほど効果は無い様子である。顎をやや上げ、見下すような月夜の視線に光は負けてしまった。誤魔化す様に光が話を切り出した。

「でも、最近は危ないよね。昨晩だけで3人だかが襲われたんだって。誰も何も盗られていないし、被害はなかったみたいだけど」

手で扇ぎながら、一也が首を傾げた。

「被害なし？じゃあ、何で襲ったりしたんだよ」

「・・・『呪いの力』を無くしたんじゃないのかしら？」

一也の台詞に被せるように月夜が言った。その答えは的を射ていたのか光が月夜の方を見た。

「正解！月夜ちゃん、よくわかったね。話の落ち、なくなっちゃった」

少しガッカリと、でも当てられたことの驚きの方が大きいらしかった。光は、再び上を向き両腕を背もたれの後ろでぷらぷらさせ始めた。

「襲われた3人とも呪い持ちの人で、気がついたら呪いが使えなくなっちゃってたらしいよ～。そもそも呪い持ちの人って、実際にあんまり見かけないしよね」

他人事の様に話しているが、まさしくその通りで、呪いを持たなく超能力の分野に分類される光には大して怖くない事件である。

「ふ～ん、成る程ね」

不機嫌だった月夜の顔には、いつもの余裕が戻り何か考えている。空の一点を見つめ、何かを思い返している様子でもあった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5172m/

３種の神器

2010年10月21日14時39分発行